
蕾

奈津美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蕾

【Nコード】

N8296B

【作者名】

奈津美

【あらすじ】

組織は滅亡し、平和を取り戻した江戸川コナンは工藤新一に戻れると思っていたしかし、灰原哀はAPT-X4869の解毒剤を完成させたものの……

0 プロローグ

ほんのひとときでいいから

あなたの傍でいさせて欲しい

ほんのひとときでいいから

あなたに抱きしめて欲しい

工藤君、愛してます

お願いだから、どこにもいかないで――

。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。

――4月上旬

もう桜も葉桜になった頃

私は解毒剤を完成できた

黒の組織を倒した工藤君

組織にあったデータを元に薬を完成させた

本当に大変な日々を過ごして来た彼

普通は葉を渡してあげるだろうけど・・・

私、渡したくない

「どうして・・・？」

どうして彼を好きになってしまったのでしょうか・・・

0 プロローグ（後書き）

奈津美です。

この前始めた連載物は長続きしなさそうだったので
急遽この話にしましたゞ（≡▽≡＊） //

小説を消されてしまったので・・・いところに
今だにショックです。（叶わなき夢は自分で消しました
けど、この話は頑張ります（＊・ω・）ノヨッ

評価お願いします（○＊。―。）（○ペコッ

1 手紙

私は外の空気を吸おうと外に出た

いつものように郵便受けの中を覗く

すると、中には手紙が入っていた

とても可愛いピンクの封筒で

差出人は

『毛利蘭』

「・・・何かしら。」

哀はとりあえず家に戻り、手紙の封を開けた

蘭さんが、どれだけ悲しんだか・・・知ってる

私もおねえちゃんがいなくなってからいっぱい泣いたもの

こんなのわがままかもしれない

けど、初めて好きになった人だから・・・

渡したくないんです・・・

おねえちゃん、私って最低ね

『拝啓 灰原哀様

こんな書き出しは堅苦しいよね

けど、どうしても聞きたいことがあります

新一はどこにいるんですか？？

黒の組織に関係してたんでしょう？？

新一は、黒の組織に関係してたんでしょう？？

・・・哀ちゃんも、組織の一員だったって

自分から話してくれたね

だから・・・知ってるんじゃないかって

そう思ったの・・・

ゴメンね、自分勝手だよ

哀ちゃんが知ってるわけ無いのにね・・・

けど、今でも涙が止まりません。会いたいんです。

・・・またね、哀ちゃん

毛利蘭』

蘭さん、知ってます

あなたの愛している工藤新一は

あなたのすぐ傍にいるんです

けど、私はひどい女だから言えません

だって、黒の組織にいたんだもの

哀は、コーヒーを飲みながら外に目をやる

・・・まだ、花が咲かないわ

庭に植えたたくさんの花達に、咲いてねと言いながら愛情こめて育てた

私らしくないって思うかもしれないけど

工藤君が・・・

『博士の庭って、殺風景だな。なんか育てたら?? 灰原、育ててみるよ。』

『え・・・?』

『お前が育てたら、花も綺麗に咲きそうだろう?..?』

『・・・工藤君。』

『バーロー。まだ江戸川コナンだよ・・・。』

最後の言葉に私は胸を痛めた

まだ、江戸川コナン

そして、ずっと江戸川コナン・・・

工藤君の言葉はそう言ってるように聞こえた

ゴメンなさい、工藤君

こんな最低な私でゴメンなさい・・・

4月になったというのに、冷たい風が街を吹き抜けた

1 手紙（後書き）

シリアスって難しいですね。

哀ちゃん・・可哀相です。

なんか性格違うかもしれませんが許して下さい。

評価、感想、アドバイスお願いします。

2 本音

ピンポーン

誰かが呼び鈴を鳴らす

今は、誰の顔も見たくはないけれど

博士はいないし・・・

哀は渋々玄関まで歩いた

ガチャ

「・・・よ。」

「江戸川君・・・。」

「ちょっと、話があるんだけど。いいか？」

「・・・ええ。」

本当は、あなたに会いたかった

けど、泣いてしまいそうで怖かった

彼の優しい顔を見たら・・・

「博士は？」

「さあ？どこかに行ってしまったわ。」

私が、解毒剤が入ったケースを引き出しの奥にしまった

彼には・・・渡せない

渡したくない

「・・・解毒剤、できそうか？」

ズキン

胸が凄く痛む

愛しい彼への嘘がこんなにも辛いなんて

私・・・知らなかった

「・・・もう少しかかりそう。」

「そっか・・・。」

「・・・戻りたい？」

「あたりめえだろ・・・。」

「彼女のため？」

「・・・ああ。」

ズキンズキンズキン

どんどんと胸の痛みが悪化する

分かっていたはずなのに

彼が蘭さんを好きだってことは分かっていたはずなのに

どうしてこんなに好きになってしまったんだろう

「・・・そう。」

「俺、いっぱい泣かせちゃったから。」

「・・・。。。」

自然と涙が零れた

頬を伝う涙は・・・冷たい

温かい頬に冷たさを与えた

「灰原・・・？」

「ゴメンなさい・・・ゴメンなさい・・・。」

哀は壊れたからくり人形のように何度も呟いた

自分の弱さ、自分の醜さに涙をこぼす

コナンは何度も温かく優しい手で哀の頭をなでた

彼が愛しい、彼といたい・・・

おねえちゃん、こんな妹でゴメンね

けどね、おねえちゃんだって恋は叶ってほしかったでしょう？

宮野明美

彼女の姉は、赤井秀一に恋をしていた

そして、赤井秀一も・・・明美に・・・

お互いの恋は叶ったが、もう二度とお互いが会えることは無い

灰原哀

彼女は、江戸川コナンと工藤新一に恋をしていた

江戸川コナンは、毛利蘭に恋をしている

お互いの恋は叶わぬままであり、成就することのない恋である

もちろん、コナンの恋は叶うだろうが

それは、元の姿に戻ったらの話である

しかし、元の姿に戻ってしまったら・・・哀の恋は

「・・・っ・・・っ。」

叶わない

この言葉が頭にぐるぐる回っている

分かりきったことでも、ほんの少し希望を持ってしまう

解毒剤を渡さなければ――――

悪いことだと分かっている

けど、私は元々悪い人だもの・・・

「・・・灰原、大丈夫か？」

「・・・大丈夫よ。ゴメンなさい。」

大丈夫な訳が無い

本当は彼にすがりついてしまいたい

彼に抱きついてしまいたい

けど、そんなことしたら彼はどうなるの

きつと困り果てるわ・・・

幸せになりたいです、おねえちゃん

あなたの分まで・・・

2 本音（後書き）

可哀相だけど、コ×哀じゃない点は

お許し下さいませ（○＊。―。）○ペコッ

・・・本当にかわいそうになってきました

評価下さい（○＊。―。）○ペコッ

3 罪人

私はここにいてはいけない人間

それも分かってるけど、彼がいるから・・・

ここにいたいって思ってしまう

組織が破壊され、私はどこか遠くに行こうと思ったの

けど、警察に連行されるジンを見たら

・・・泣いていた

そして、その三日後、目暮警部から手紙を預かった

ジンからの手紙

『シェリー

宮野明美の分までしっかり生きろ』

それしか書いてなかったけれど

封筒の中にはネックレスが入っていた

飾りを開くと、小さい頃の私と家族の写真が入っていた

・ ・ ・ 自分の罪は自分で償おう

そう、心に誓った

しかし、私はまた罪を重ねている

人に嘘をつく

これも立派な罪だと思う

本当に戻りたい彼に解毒剤を渡さないなんて

最低よね
・
・
・
私

誰でもいいから私に怒ってほしい

「
・
・
灰原。」
」

「何かしら？」

「お前に負担をかけるように悪いけど、俺は元の姿に戻りたい。」

「分かってるわ。」

「だから、頑張れよ。研究。」

「……ええ、ありがとう。」

頑張れ……。？

私はあなたを騙しているのよ

それなのに……。そんな言葉……

「じゃあ、それだけだから。」

「……。……。待って!!!!!!!!!!」

私は必死になって引き止めた

……。何を言うの？

行かないで欲しかったから引き止めたのはいいけど

何を言えばいいのかしら……

「もし……もしよ、蘭さんが他の人を好きになったらどうするの？」

「全力で奪い返すかな？けど、蘭が幸せならそれでいい。」

そこまで蘭さんのこと・・・

それなのに、どうして私は諦めがつかないのかしら

バカね・・・本当にバカ

「そう・・・。」

「お前、なんか変だけど・・・どうしたんだよ。」

「・・・別に。」

「・・・嘘だろ。なんかあったんだろ??」

「・・・。。。」

何で好きでもないのに優しくするの

何で好きでもないのに心配するの

私・・・これ以上好きになったら

自分が自分じゃなくなっちゃうじゃない

「・・・心配なんかしないで。」

「ハッ?？」

「好きでもないのに心配なんてしないでよ!!」

「はぁ? 何だよそれ。」

「いいから帰ってくれない? 研究があるから・・・。」

「は、ちょ・・・自分で引き止めたくせに。」

哀は無理矢理コナンを玄関まで引っ張った

これ以上、私をドキドキさせないで

お願いだから・・・お願いだから・・・

「ゴメンなさい、江戸川君。」

「・・・へ?」

「今日は・・・帰って。」

「・・・よく休めよ。」

コナンは浮かない顔で玄関から出た

ゴメンなさい、江戸川君

開いたままの玄関のドアから入る風

決して春の陽気なんて感じる事ができなかった

3 罪人（後書き）

(((* ≧ ∇) 八 (ω ≦ 。))) コンバンワ

奈津美です♪

今回もまたシリアスな話ですね・・・

あ、評価が無くて少し寂しいです○TZショボーン

なので、評価下さいヾ (≧ ∇ ≦ *) //

返信します (* ・ ω ・) ノヨッ

4 嫉妬

「・・・灰原の奴。」

コナンは少し怒った表情カオをしていたが

心の中では哀のことを心配していた

あいつ、自分で全部背負い込むから・・・

また、お姉さんのことか？それともまた組織のことか？

「あ、コナン君！！！」

「歩美じゃねえか。どうした？？」

「お使いだよ！！コナン君は？？？」

「俺は、灰原にちよつと用があつてさ。」

・・・哀ちゃんに？

いつもは博士に用があるって言うのに

今日だけ哀ちゃんって言うんだね

歩美は何だか分からない感情を抱いた

・・・哀ちゃんが羨ましい

けど、すっごく悔しいのはどうして??

嫉妬

それはまだ一年生には理解しがたいことかもしれない

「コナン君、どうしてそんな表情カオしてるの??」

「・・・え？」

元気には見えない表情

何か悩みを持っているのかと思うくらいだ

「・・・歩美じゃ力になれない??」

「歩美・・・。」

いつもいつも守ってもらえばっかり

コナン君は歩美にとっての王子様なんだよ

コナン君がいると、まるで自分が姫み^{プリンセス}たいになれるの

「何かあったの?？」

「・・・ちよつと、灰原と色々あったんだ。」

色々って何?

何があったの・・・?

歩美に会う前に、二人の間に何があったの?

凄く悔しい・・・悔しいよ

「ケンカ?」

「いや、分からない。帰れって言われたからさ。」

「・・・ひどい。」

「いや、俺が悪かったんだ。あいつ・・・疲れてたんだよ。」

「・・・そっか。」

「ありがとな、なんかすっきりした。」

コナンは歯を出して笑った

・・・カッコいい

「ねえ、コナン君。」

「ん？」

「歩美、コナン君のこと・・・大好きだよ!!!」

「・・・歩美。」

「だから、力になりたいし・・・ずっと一緒にいたい。」

YESかNOか

そんなの決まっているだろう？

けど、歩美の顔を見たら・・・言えない

俺には他に好きな人がいるからって・・・

江戸川コナンはもうすぐ消えるからって・・・

「・・・俺。」

「返事はいつでもいいよ!!!」

「歩美・・。」

「だから・・・バイバイ!!!!」

歩美はすぐさまこの場を立ち去った

すれ違った時に見た、目から零れ落ちる涙

・・・ゴメンな、歩美

俺じゃない人と幸せになってくれないか？

探偵事務所への道のりは遠く

足取りは重かった・・・

俺は何人の人を傷つけてきたのだろうか

俺は何人の人を泣かせてきたのだろうか

4 嫉妬（後書き）

（ ）（＊≧▽）八（ω≦。）（ ）（コンバンワ

今回は歩美とコナンでいきました☆★”

歩美ちゃん・・凄く好きです。

これからの展開、力をこめて書きたいですo（・ゝω・）キュ！

評価お願いします。＋∴。（・ω・）b ∴＋∴。グツ

5 友達

ピンポン

今度は一体誰？

もしかして・・・工藤君？

甘い期待を抱いてしまう弱い自分がいる

哀は走って玄関まで行き、ドアを開けた

・・・吉田さん？

ドアの前には泣きはらした目をした吉田さんがいた

「哀ちゃん、話があるんだけど・・・いいかな？」

「・・・ええ、あがって。」

本当は、こんな真っ赤な目をした自分を見られなくなかったけど

彼女の目も真っ赤ではれていたから共感できたし安心できた

きっと何かあったんだ・・・相談に乗って欲しいのかしら？???

「・・・哀ちゃんも泣いてたんだ。」

「・・・ええ。」

「・・・コナン君と何かあったの??」

「・・・別に。」

歩美は勢いよく立ち上がった

「どうして哀ちゃんは自分を出さないの!??」

「・・・え?」

「歩美じゃダメなの? 歩美には話してくれないの?」

「・・・吉田さん。」

「哀ちゃんに何があったのか、黒の組織がどれだけ怖かったかなんて歩美には分からないけど歩美は哀ちゃんの友達だよ。」

「・・・。。。」

友達

なんて良い響きなんだろう

久しぶりに聞いた言葉に感動した

「そうね、話してみようかしら。」

「・・・聞きたい。」

「・・・私ね、あなたと同じ人を好きになってしまったの。」

「・・・え？」

「けど、あなたの恋は応援しているの。そして、自分の恋にも応援している。」

「どういうこと？」

照れくさいけど、私の本音

話せる人はあなたくらいよ????

「つまり・・・私は、誰よりも彼に幸せになって欲しいの。」

「哀ちゃん・・・。」

春風で、庭の花は揺れていた

まだ、花は咲きそうにはない

・・・まるで私達の様だった

「哀ちゃんはやっぱり大人だね。」

「そう？ 私はあなたの方が羨ましいけど？」

「え？ 何で？」

何事にも真剣で可愛いあなた

何事にも全力で取り組む立派なあなた

彼が大好きで、優しいあなた

私はそんなあなたが大好きなのよ・・・

「秘密よ、秘密。」

「えー教えてよ・・・哀ちゃん。」

「・・・もう少し経ったらね。」

庭の蕾が花開く時には

もっと素直になれていたらな・・・

「うん、じゃあ約束!!」

「ええ、約束。」

「ゆーびきりげーんまーんうーそついたらはーりせんぼんのーます
っ!!」

吉田さんの小指・・・とても細くて綺麗だった

それに・・・とっても温かい

まるで・・・あなたの優しさのよう

「哀ちゃん・・・これから頑張ろうね!!」

「・・・・。」

吉田さんは、まだ・・・江戸川君と工藤君が同一人物だって知らない

けど、言ったら彼女はいっぱい傷つくでしょうから

まだ・・・それも秘密

だって、あなたの無邪気な笑顔も好きだから・・・

もし、言ってしまったら

あの笑顔が見れなくなるんじゃないかって不安になるの

これも・・・秘密

「じゃあね、哀ちゃん。」

「待って。」

「ん？」

「・・・どうして泣いていたの？」

「この恋は叶わないって・・・思っちゃったんだ!!」

「吉田さん・・・。」

「恋は前向きに!! ってお母さんが言ってた!! じゃあ、バイバイ
!!」

歩美は無邪気な笑顔で手を振り、家へ帰って行った

5 友達（後書き）

哀ちゃんと歩美ちゃんの友情物です（σ*ゝω・）σЙë☆
この二人・・・書いて嬉しいですゞ（≧▽≦*）〃

これからもこうゆう二人を書いていたら
嬉しいDĒ―。＋・、（*、∀、*）ノ。＋・―SЦ！！

評価、感想お待ちしてます。

後、どうやったら文字が小さくなるか教えて下さい
短編はできるけど、連載はできないんです
知っている方は、私に教えて下さい
お願いします（o*。―。o）oペコッ

6 漆黒

―夜

博士はベロベロになって帰ってきた

どうやら、親しい友人と飲みに行ってたそうだ

・・・酒臭い

明日は二日酔いになることを予想した

とりあえず、酔い覚ましの薬を博士に飲ませて

寝室まで引きずった

寝室横たわる博士にトイレの消臭剤のスプレーをかけたのは内緒よ

「哀君・・・。」

気持ち良さそうな顔で寝言を言う博士を可愛いと思ってしまった

黒の組織が無くなってから、博士はフサエさんとデートの回数を重ね

今度プロポーズをするとウキウキしていた

私も、博士には幸せになって欲しい

聞きなれたお天気キャスターの声を聞きながら

苦めのブラックコーヒーを一杯飲む

・・・今日も花は咲いていない

哀はカーテンをギュッと握り締めた

「・・・はあ。」

どうしたら咲くのだろうか・・・

いっぱい水もあげているし、肥料もあげている

何一つ怠ったりはしていないというのに・・・

「あ。」

いつもにまして寝起きが悪い博士の代わりに新聞を取りに行った

朝の空気は美味しかったけど、ほんのりと冬の冷たさも感じた

・・・もう、春だというのに

「・・・あら？」

いつもの新聞と、真っ黒な封筒が一つ

・・・また、蘭さんかしら？？

自分の醜さや心の弱さに胸がキューと締め付けられるようだった
しかし、それと同時に

自分に手紙を出してくれる存在がいることに胸が温かくなった

「・・・差出人が書いてない。」

良く考えたら、蘭さん・・・こんな真っ黒な封筒使うかしら？

もっと明るい色よね・・・

哀は疑問を持ちながらの封筒の封を開ける

何だか・・・胸騒ぎがする

哀は、折りたたまれた便箋を開いた

この時、開かなければあんな事件は起きなかったのかしら・・・

6 漆黒（後書き）

漆黒

封筒の色でもあり、哀ちゃんが思う自分の色

を表したかったのですが・・・無理です○TZシヨボーン
哀ちゃんにはもっとポジティブになって欲しい物です（＊・ω・）

（＊ーωー）ウン

評価、感想お願いします。（・D・）（・D・＊）ねー

7 電話

哀は目を疑った

・・・どうして???

震える手足・・・霞む目

最初の一行から信じられなかった

『シェリー

もう一度、俺とやらないか？

って言える立場でもねえか

兄貴には悪いが、俺は罪を償う気はこれっぽっちもねえ

だから、お前に薬の研究を手伝ってもらいたい

・・・毒薬だ

人を一瞬で殺せて、跡形も無く消せる薬が欲しい

・・・俺の復讐のために

そろそろ、光に飽きて闇に戻りたいと思うだろう???

良い返事を期待してるぜ、シェリー

ウォツカ
『

ウォツカ

ジンの弟分であり、組織の一員

組織の一員はみんな捕まったんじゃないの!?

・・・そうだ、ジョディ先生

朝早く電話をかけるなんて少し気がひける

しかし、今はかけるべきであろう

ウォツカが捕まっていない

これは真実か

それともこの手紙は罠で

トラップ

私を陥れようとしているのか

RRRRRRR・・・

『はい、ジョディです。』

『・・・ジョディ先生??』

『あら〜どうしたの???』

『・・・あの、組織の奴等は全員捕まったんですか??』

『どうして・・・?』

『・・・ウォッカから、手紙が来たの。』

『・・・実は、ウォッカだけ見つからなかったの。』

あのベルモットでさえ捕まったというのに

どうして・・・ウォッカだけ逃げ切れたのだろうか

『どうして?..?』

『分からないわ・・・最初はあの爆発に巻き込まれたと思ったんだけど。』

あの爆発

コナンとFBIが組織のアジト内に侵入した時

ベルモットが自爆装置のスイッチを押していた

後5時間で爆発だと分かっているながらも懸命に戦って

組織の一員を逮捕することが出来た

そして、5時間後

アジトは跡形も無く消えてしまった・・・

もちろん何も知らずに研究していた下っ端は何人も死体で発見された

あまりにもひどい物で、身元さえ分からなかったのだ

『・・・じゃあこの手紙は?』

『さあ?』

『・・・どうしたらいいかしら?』

『・・・じゃああの人に聞きましょうか?』

『あの人?』

『ジンよ。』

『・・・ジン。』

哀は汗ばむ拳をギュッと握った

7 電話（後書き）

はい、奈津美です。

私って手紙ネタしか書けないんでしょうか？？（笑

ジンに会ってから、解き明かされる謎

そして、宮野明美についてもよく分かります。

評価、感想、下さい（〇＊。―。）〇ペコッ

8 再会

―午前10時

哀はジョディ先生に連れられて、警察まで行った

警察で目暮警部に会い、ジンに会うための道^{ルート}を案内してもらった

・・・まるで迷路^{ラビリンス}

「このドアの向こうにいるよ。」

哀はゴクンと唾を飲み込んだ

かつて憎んでいた相手と再会するなんてね

・・・あの人^{ジン}はおねえちゃんを殺した

それを分かっているというのに

あの手紙を見てから、ジンを少し信用できるようになってしまった

・・・バカみたい

あんなの嘘かもしれないのに・・・

「・・・開けるぞ。」

「ええ。」

ガチャ

開かれたドアの向こうでは

長い髪を短くしていたジンが

ガラスの向こうで俯いていた

「・・・ジン？」

私が彼の^{ジン}名前を呼ぶと

あの頃とは違う眼で私をジッと見つめた

「・・・久しぶりだな。」

時は人を変えるのだと私はそう思った

「ええ、お久しぶりね。」

「何か用か？」

「・・・ウォツカは死んだの？」

ジンは眉間に皺シワを寄せて口を固く閉じた

・・・きつと、何かを隠している

目暮警部はいつの間にか部屋からいなくなっていた

きつと気をきかせてくれたのであろう

「・・・あの爆発に巻き込まれたと思ったた。」

「・・・思ってた？」

「・・・けど、違ったんだ。」

ジンはガラスに開いた小さな穴から一通の手紙を差し出した

哀はジンにこれは何？と聞く

ジンは何も言わなかった

「……………」

『シェリーへ

俺の初恋は、宮野明美だ。』

「じゃあ・・・どうして殺したの。」

「・・・・。」

「ねえ、ジン・・・・。」

「・・・・。」

「ねえ・・・教えてよ。」

何も言わずに口を固く閉じるジン

私はたくさんこみあげる感情に身を任せた

「どうして殺したのよおお！！！！！！」

小さな空間に、哀の震える声が響き渡った

―ドウシテコロシタンスカ???

8 再会（後書き）

ああ・・6（・∀・Më）のジンって
なんか優しくなっちゃうんですよね
けど、こういうジンがいいですww
これからのポイント整理いい

●哀の恋物語

●ジンと明美の過去

●ウォツカの陰謀

●歩美の行動

こんなもんでしょうか・・・

これからも頑張りますので、評価お願いします!!!!

読者1000人突破しました、（||、▽、||）ノ

9 過去

ジンとおねえちゃんの間になにかあったのか

私は気になってジンに聞いてみた

ジンは私から顔を隠すように下を向きながら話し始めた

。 。 。
+ ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ +
+ ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ +

宮野明美がまだ子供の頃

ジンと出会った

ジンは捨て子で、組織に拾われたのである

「よろしくね!!!」

「ああ、よろしく。」

ジンはその頃中学生であったが

学校には通わせてもらえなかった

『友達が欲しい』

まだ子供だったジンはそう思っていたのだ

「これからはお友達だよ。」

「・・・ああ。」

「えっと・・・名前は???」

「・・・。。。」

赤ん坊の頃、アジトの前に捨てられた

俺の名前と『この子を育てて下さい。』と書いてあるカードをそえて

俺は組織のみんなからその話を聞いた

俺の名前は『ケイト』

しかし、この組織のボスは俺に名前を捨てろを命じ

『ジン』と名づけられた・・・

「・・・ケイト。けど、もうこの名前は捨てたんだ。」

「だめよ!」

急に明美が大声で怒鳴るので、ジンは目を丸くした

「名前って、親が子供に愛情を込めてつけた物。一番最初に愛情を込めて決めた物なのよ。」

「・・・。」

明美はニツコリ笑ってそう言った

じゃあ、どうして俺は捨てられてしまったのだろう・・・

「・・・あなた、親がいないの?？」

「・・・まあな。」

明美は何も聞かず、微笑みながら俺の手を両手で握った

・・・温かい

「私のお父さんとお母さんも亡くなったの。」

「・・・。。。」

「だから、あなたの気持ちは良く分かるよ。」

「・・・明美さん。」

「明美で良いわよ？」

「・・・明美。」

「うん、ヨロシクね。ケイト。」

初めて呼ばれた名前だったから、照れくさくなって

つついそっぽを向いてしまった

明美はまた可愛い笑顔を俺に見せた

ドキドキドキドキ

胸の鼓動が高鳴る

「ねえ、ケイト。」

「ん？」

「この組織は悪い所だけど、お互い頑張りましょうね。」

俺は小さく頷いた

ドキドキと高鳴る胸の鼓動が明美にも聞こえてしまうのでは無いか
それくらいドキドキしていた

・・・初めての恋は甘く苦い物だった

9 過去（後書き）

ああ・・・これから可哀相なジン・・・ってコトになっ
ていつてしまいます・・・（ノ◇≡。） ウウ

運命、連載開始してしまいましたゞ（≧▽≧≡＊） //

連載では初挑戦なコ×蘭DĖ――。＋、（＊、∇、＊）ノ。＋――
SⅡ！

最後までコ×蘭でいくかどうかは・・・

新×蘭、平×和しか書いたコト無いんですよね
だから・・・ちょっとそこらへん不安です。

評価お願いします（○＊。――。）○ペコッ

10 失恋

私はジンからの話を聞いて、目に涙を浮かべた

私はその頃おねえちゃんに会わせてもらえなかったから

・・・何も知らなかった

やっぱりおねえちゃんは誰にでも優しくかったんだと思うと

自然に涙がこみ上げて来た

けど、ジンには弱さを見せたくなかったから・・・

上を向いて、涙を堪えた

。。。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。
。。。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。
。。。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。

「もしもし、秀一さん？」

出会ってから何年もの歳月が経ち、二人共大人になった

俺は明美への思いを募りに募らせていた

しかし、ジンは知っていた

明美はCIAで、組織を探っている側の人間だと

そして、赤井秀一の恋人だと・・・

「うん、分かったわ。」

ピッ

携帯を切る音が部屋に鳴り響く

ここは研究室

もちろん他には誰もいない

まあ、俺も物陰に身を隠しているが

「・・・ハア。」

彼女が見せる悲しい表情に

俺は胸を痛めた

初恋は、失恋へと変わっていた

「明美。」

「あ、ケイト。」

周りに人がいないか確認して、“ケイト”と呼ぶ

この名前は禁断の名前だから

明美だけに呼ばれる名前があることが幸せだった

しかし、今は・・・

苦しい

叶わないと分かっているのに、思いが更に募る

「・・・ねえ、ケイト。」

「何だ？」

「・・・志保は、元気なのかしら。」

宮野志保

小さい頃には別々に暮らしていて

一年に一回は会えるけど、それはとても待ちきれない

たった一人の・・・家族であり、妹である

「・・・ああ、ピンピンしていたさ。」

「良かった・・・。」

「・・・。」

「ねえ、ケイト。」

明美は小さな箱を取り出した

「私が死んだら、この箱を渡して欲しいの。」

「・・・分かった。」

死ぬはずが無いだろう？とは言えなかった

宮野志保は認められていたが

宮野明美は認められてなかった

次の仕事を失敗したら・・・明美は

俺は汗ばむ拳をギュッと握った

「・・・明美。」

ウォツカは何も言わずに立っていた

ジンは震える手で拳銃を握った

「・・・私を殺しなさい。」

「!?!」

「・・・私は所詮、ただの裏切り者。」

“裏切り者は生きている資格が無い”

分かっている、分かっているんだ

心では分かっているけど、身体が・・・

「早く殺して!!!!・・・ケイト。」

「・・・・・・・・。」

ジンの頬には涙が伝う

・・・殺したくなんか無いのに

「私が生きていたら、志保に危害が及ぶかもしれない。」

「・・・。」

「ケイト、志保を守って???」

「・・・誓うよ。」

「・・・ありがとう。」

明美はギュツと目をつぶった

ジンは叫びながら拳銃で明美を撃った

バンツ!!!!!!!!!!

「・・・バイバイ、ケイト。」

「くそおおおお!!!!!!!!!!」

「・・・愛してくれてありがとうね?」

「お前・・・知ってたのか?」

明美は引きつった笑顔で頷いた

ジンは溢れる涙を拭いて、車に乗り込んだ

ウォッカはそんなジンをずっと見つめていた

「・・・」

明美は震える手で、ジンへメールを打った

その後、コナンが駆けつけたのだ・・・

。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。
。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。
+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。
+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。

哀は涙を何度も拭った

ジンは・・・目に涙を浮かべて小さな箱を取り出した

「これを渡したかったんだ。」

哀はすぐにその箱を開けた

中にはピンクのダイヤが散りばめられた指輪

「・・・それと。」

ジンは警察官を呼ぶと、携帯を受け取っていた

手馴れた手つきで携帯を捜査した

「これ、明美から。」

携帯画面で出ていたのはお姉ちゃんからのメッセージ

『志保へ

このメールを見る頃にはお姉ちゃんはもういないでしょう

ジンは何も悪くないの

だから、私の分まで幸せになってね。

ケイトへ

今までありがとう

愛してあげることが出来なくてゴメンなさい・・・。」

哀は声を押し殺して泣いた

ジンには弱さを見せたくなかったのに・・・

ジンは、申し訳なさそうな顔で哀を見つめた

コンコン

ガチャ

「そろそろいいかね？」

目暮警部は私を見て驚いていたけど、何も言わずに家まで送ってくれた

お姉ちゃん、私はお姉ちゃんの優しさが良く分かりました

あなたがくれたプレゼント、私の指で輝いています・・・

けどね、お姉ちゃん・・・

私、凄く凄く苦しくて、悲しいよ・・・

風は温かく、春の陽気を感じさせた

しかし、哀の心はまるで氷の様に冷たくなっていた

10 失恋（後書き）

はい、ジンの可哀相な過去でした。

・・・書いて悲しくなりましたもん。

更に・・・哀ちゃん的心情バランス？が崩れてきます

ああ・・・シリアスめ・・・（ノ◇≡。） ビューン！！

けど、書くのは好きなんですよねえ♪w

評価下さい（○＊。|。）○ぺコッ

読者数1400人突破ですY（Y（Y（Y（Y（ヾ（○、D、）ノ
ヒヤッホーウ♪

11 弱心

哀はウオツカのことなど忘れて、悲しみに浸^{ヒタ}っていた

誰も私の涙を止めてくれないのね

哀は一人寂しく泣いた

博士は、フサエさんとデートに出かけてるし

あの子達はきつとサッカーでもしてるわ・・・

彼と一緒に・・・

「・・・。」

目に入っただのは博士の剃刀^{カミソリ}

ジンを疑うことしか出来ず、お姉ちゃんを助けることも出来ず

何の力にもなれなかった自分が不甲斐無い

それに、こんな悲しい過去を知らなかった私が憎い

哀は自分のせいだと過去を背負い込む

別に哀のせいでは無いが、悲しさのあまり冷静な考えを持てなくな

っていた

「・・・。」

手首を切りつけてできる自傷^{リストカット}

怖い・・・怖いけど・・・

この悲しみを忘れさせてくれるのでは無いか

無茶苦茶な考えだが、そう思いこむことが哀の憩^{イコイ}であった

「・・・ねえ、お姉ちゃん。きっと怒ってるよね？」

自分の命を削ってまでも守ってくれた私の命

そんな命を無駄にしてはいけない・・・

分かっているのに・・・

「・・・。」

哀は剃刀^{カミソリ}を汗ばむ手で握った

そして・・・手首にそつと当てた

「灰原ア!!!!!!!!!!」

「!?!」

コナンがすぐに哀の腕を掴んだ

「何やってんだ!! テメー!!」

「・・・江戸川君。」

灰原・・・?

哀の目から、力なんて感じられなかった

まるで屍シカバネのような・・・

「おい、灰原!! どうしちゃったんだよ!!」

「・・・ッ。」

哀はコナンにギュッと抱きついて

子供の様にエンエン声を上げてないた

「……………」

俺は初めて、灰原のこんな表情カオを見た

……どうしちゃったんだ???

俺は震える灰原をギュッと抱きしめた

……こいつのことだから、怒るだろうな

けど、子供みたいに泣いているお前を見てたら

ほっとけなくなっちゃったんだよ……

しかし、哀はコナンの予想と裏腹に

顔を少し火照らせながら、心地よさそうな顔をしていた

「……テーブルの上の手紙。」

「え?」

「……………」

おそらく見て欲しいのであろう

コナンはスッと立ち上がって、手紙を読んだ

・・・嘘だろ??

俺はすぐに灰原の表情カオを見た

・・・嘘じゃないんだ

何度も首を縦に振る灰原の表情カオは嘘をついていなかった

「・・・捕まったんじゃないのかよ。」

「・・・ジンに会ってきたの。」

「!?!?」

「・・・ウォツカは、あの日アジトにいなかったそうよ。」

「・・・じゃあ。」

「まだ・・・どこかに身を潜めているってことかしら?」

灰原はいつもの様に振る舞っていた

しかし、涙が止まりそうには無い

「・・・聞かせて欲しい。ジンから聞いたこと。」

「・・・ええ、分かったわ。」

哀はコナンに全てを話した

ウォッカのことと・・・宮野明美のこと

カタカタと風が窓ガラスを叩いた

11 弱心（後書き）

弱心　じゃくしんです

哀ちゃんに自殺未遂なんてさせてしまっすいませんけど、よく考えたら・・・組織抜け出すさいに哀ちゃん・・・一度自殺しかけてますよね。

なので・・・二回目ということで・・・ハイ可哀相な思い、いっぱいいっぱいさせてしまうけどきっと幸せにしてあげますゞ（≧▽≦＊） //

12 純白

小さい頃、大好きだった色がある

“純白”

後に自分が“漆黒”になるとは知らずに・・・

。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。

「灰原、この手紙をどう思った？」

「・・・私を陥れる罠^{ワナ}か、暗黒^{ミチシルベ}への導^{ミチシルベ}か。」

「・・・そっか。」

それにしても・・・何故灰原を？？

何かの研究をするつもりなのだろうか・・・

まさか、またA P T X 4 8 6 9 の様な毒薬を？？

「灰原、行くなよ。」

「バカね、行くわけ無いじゃない。」

「なら・・・いいけどよ。」

「それに、行くとしても・・・何処へ？」

確かにそれもそうだ

いつ何処に行けばいいか、記されてもいない

まさか・・・まさか・・・

ガチャ

玄関の扉が開く音がする

おそらく博士が帰って来たのだと・・・

そう・・・思っていた

「久しぶりだな、シェリー。」

「・・・え？」

俺と灰原はすぐに振り返る

・・・嘘だろ????

振り返って目に入った者

博士が・・・ウォッカに・・・捕まっている

博士は意識が無いようだ

ウォッカは後ろから博士の首に腕を回している

更に、頭には拳銃を突きつけている

「よお、眼鏡の探偵さん。」

「お前・・・何でここに!？」

「俺は待てない性格なもんでね。迎えに来てあげたのさ。」

哀はブルブルと身体を震わせている

そんな哀の手をコナンはギュッと握ってあげた

“大丈夫”

コナンは目で哀にそう伝えた

哀は小さく頷いた

「ウォッカ、お前の目的は何だ。」

「・・・いいだろう、特別に教えてやる。」

ウォッカは自慢げな笑みを俺たちに見せる

サングラスの向こうの目が笑っている様にも見えた

「俺の目的は、心を操る薬を作ること。」

「心を操る薬・・・？」

「ああ、自由自在に人の心を操れる薬さ。」

「・・・そんな物が出来る訳無いでしょう？」

「ああ、それはさすがに。」

二人はウォッカをバカにするようにそう言った

「お前ら・・・バカにしたらこのハゲジイ撃ってもいいんだぜ？」

「博士！！！！！！」

「くっそお・・・てめえ・・・。」

「フン・俺は真の悪に目覚めたのさ・・・。」

どうやら本気の様である

博士を助けるのが最優先だ

「・・・どうしたら博士を解放してくれるの??」

「お前が研究を手伝うと言ってくれたら解放してやる。」

「・・・ジンみたいに罪を償う気は無いのか??」

「悪いが、兄貴の様に心を入れ替える気は全く無い。」

哀は下唇をキュッと噛む

自分が犠牲になれば、大切な人を守ることが出来る

・・・元々、純白なんかになれるはずが無いのだから

「分かった。手伝う気が無いのなら次はあの眠りの小五郎達でも人質に・・・。」

「やめろ!! 蘭とおっちゃんに手え出すな!!!!!!」

「・・・。」

こんなにも必死な彼のためにも、私が犠牲に・・・

そうすれば・・・みんなを助けることが出来るのよ

「まあ、今日はこのくらいにしてやろう。」

「心操作なんて、私には出来ないわ。」
マインドコントロール

「・・・実は、作りかけの薬なんだ。」

「じゃあ、もう作り方とかも・・・。」

「ああ、もう明らかにになっている。しかし、俺にはそういう技術は無いんでね。」

「・・・。」

「まあいい、次会う時までには決断しろよ。」

「・・・。」

ウォツカは博士を床に転がして、家から出て行った

哀は身体力が抜けたのか、床にペタンと座り込んだ

コナンは哀の頭を安心させるように何度も撫でた

・・・あなたの様な人が私に近づいたら

黒く染まってしまうのよ・・・

コナンの額から汗が滴り落ちた

12 純白（後書き）

どんなに辛くても

あなたが傍にいてくれるのならば

私・・・頑張れるのに

帰って来て・・・お願い・・・

。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。
。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆

作者「奈津美DEー+、（＊、▽、＊）ノ+—S II—！」

コナン「見た目は子供、頭脳は大人・・・その名は！！！」

作者「名探偵コナン！！！」

コナン「ッ！！俺のセリフ取ってんじゃねえよ！！！」

作者「固い事は気にするな。」

コナン「ところで・・・上の詩みたいなの何だよ。」

作者「あれは・・・蘭さんの気持ちです。」

コナン「・・・ゴメンな、蘭。」

作者（バーカ！！騙されてんじゃねーよ！！）

コナン「次回も読んでくれよな・・・評価くれよな。」

作者「あわわ・・・落ち込んだよ。」

バカな会話入れています。

次回も読んで下さい&評価待ってまアす♪

13 秘密

コナンは、博士を引きずりながらベットに運んだ

そんなコナンを見つめながら哀は苦しんでいた

また・・・黒へ戻らなくちゃいけないの??

哀はボロボロと涙を流した

そんな哀の傍で、ずっとコナンは見守っていてくれた

・・・傍にいて欲しい

けど、いて欲しく無い

これ以上彼を好きになってしまったら、隠せないもの

「・・・帰っていいのよ?」

「いや、お前が泣き止むまでずっといてやるよ。」

トクン・・・

心地よい胸の鼓動が聞こえる

ダメよ、この気持ちは秘密

言いたくても言えない気持ちなの・・・

「どうして・・・？」

「え？」

「どうしてあなたはそんなに優しいの??？」

「灰原・・・。」

震えた声で言う灰原は

弱弱しい瞳[×]で俺を見つめた

・・・赤く腫れあがっている目、真っ赤になった鼻

いつもの冷静さなど、何処かへ行ってしまった様だった

「俺は・・・優しくなんかねえよ。好きな女を泣かせちまうような最低な男だよ。」

「あら・・・じゃあ私は、そんなあなたを苦しめている最低な女かしら??？」

「お前な・・・。」

“お前なあ・・・何言ってるんだよ”

そう言うつもりだった

けど、灰原が・・・顔を赤くしてまた泣くから

そんなコト言えなくなっちゃった・・・

「・・・私、行く。」

「はっ？」

「ウォッカの所へ行く。」

「バカ！！お前何言って・・・。」

「だって・・・だって・・・このままじゃ・・・蘭さんとか・・・みんな・・・」

しどろもどろに言葉を続ける哀

コナンはポンポン肩を叩いて、気持ちを落ち着かせた

「・・・大丈夫、俺が守ってやるよ。」

「・・・江戸川君。」

「・・・だから、安心しろ。お前は研究に集中して欲しい。」

ズキンズキンズキンズキン

胸の痛みが増す

・・・嘘つきな私を信じてくれるの??

叶わぬ恋なのに、期待をしている自分がいる

バカ バカ バカ・・・

本当は、解毒剤だって完成してるの??

私、何でこんなに弱いのか?? お姉ちゃん・・・

・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆

「・・・手ごわいか。」

真っ黒な車の運転座席でタバコを吸うウォッカ

ジンの兄貴を白戻したくらいだ

そう簡単に黒に戻ってくるわけないか……

けど、マインドコントロール心操作の薬は完成させたいんだ

完成させたら……自分を捨てたというのに幸せに暮らしているあいつらに……

ウォツカはタバコの空き箱をギュツと握り潰した

「くそ……あ。」

ウォツカの目線の先には、一人で歩く毛利蘭がいた

こいつを人質に取ればあの眼鏡のボウズはどうわめくだろうか

きっと必死に町中……いや、日本中を探し回るだろうなあ……ククク

ウォツカは不気味な笑いを浮かべながらゆっくり蘭を尾行する

“毛利蘭を人質に取れば、きっとシェリーも研究に協力する!!!”

「……悪いな、兄貴。」

兄貴はこんな俺を見たら、どう思うかな？

殺されちまうかもしれねえな……

けどな、兄貴

俺は、あいつらに復讐するために組織に入ったんだ

だから・・・復讐するまで警察^{サツ}の世話になる訳にはいかねえんだ

「・・・醜^{ミニク}いな。」

ウオツカは吸い殻を車の窓から投げ捨てた

13 秘密（後書き）

ウォッカは捨て子

ここがポイントです！！

さあ、これからどうなるのでしょうか
そこは楽しみで、（∥、▽、∥）ノ

ウォッカの本名（名前のみ）募集しております。
評価下さい（○＊。―。○）○ペコッ

14 誘拐

蘭は、小五郎に頼まれてタバコを買いに来ていた

近くのタバコ屋さんは、夕方までしかやっていないので

少し遠いが、タバコの販売機まで足を伸ばすしかなかった

「お父さんったら・・・。」

蘭の頬は少し膨れていた

まるでオモチャを買ってもらえなかった子供の様に

「さてと、帰るか。」

家に帰ったら・・・新一にメールを送ってみるんだ

例え、傍にいなかったとしても・・・

私はずっとずっと新一のこと・・・愛してるからね???

いつか帰ってくるって信じてるよ・・・

「お嬢さん、ちょっと待って下さい。」

「え？」

蘭は素早く振り返り、構える

何だか嫌な予感がしたのだ

「あなたは、毛利蘭さんですか??」

「え・・・あ・・・はい。」

「私は、工藤新一さんの知り合いでして。貴方を連れて来て欲しいと頼まりました。」

「新一が・・・???」

「はい、ですからこの車にお乗り下さい。」

新一に会えるの??

けど・・・簡単にこの人を信じていいのかな??

全身真っ黒な服着てるし、サングラスかけてるし・・・

まるでこの前捕まった黒ずくめの組織みたい・・・

それに、新一がこんな人に私を任せるのかなあ・・・

新一なら、自分で会いに来てくれそうだけど・・・

「・・・乗れません。」

「・・・そうですか、では・・・力づくでも乗ってもらおうか!」

「!」

男・・・ウォツカは蘭に遅いかかった

蘭は咄嗟^{トツサ}に身をかわして、相手の頬に回し蹴り

「ガハッ!」

ウォツカはその場にうずくまった

蘭がフウと一息ついたその時だった

シュー!」

「ッ!」

ウォツカはやられたフリをして、蘭の隙をつく

催眠スプレーをかけられた蘭は気を失ってしまった

「案外チヨロイもんだな。」

それにしても・・・俺って結構すごいな

自分の強さに自画自賛してしまうウォツカであった

蘭は、まるで美しい眠り姫の様な顔を見せている

ウォツカはニヘニヘしながら蘭を抱きかかえて、トランクに乗せた

さて・・・あの娘をどう犯してやろうか

藍色の空で瞬く星は寂しそうに見えた

14 誘拐（後書き）

こんにちはあ!!!

力で蘭に勝てないと思ったので

演技？で蘭に勝ったウォッカです。

自画自賛な辺りはちょこつとギャグ。（笑えないけど

これからシリアスですが・・・ギャグもww

ってな感じで参りたいかと思えます。

ウォッカの本名、決まりました。

苗字はあえて出さないことにしました、はい。

ではでは、評価&メッセージ待ってます、（||、▽、||）ノ

15 疑惑

結局、コナンは夜の10時まで博士の家にいた

家までの足取りはとても重かった

きつと蘭に怒られるだろう・・・

「・・・ただいま。」

コナンがドアを開けた瞬間、小五郎がコナンの肩を掴む

「おい、お前・・・蘭を知らねえか!!!!!!」

「え・・・いないの??」

「俺がタバコを買いに行かせたんだが。もう2時間も経ってるんだ。」

ドクン

胸が高鳴る

もしかして・・・もしかして・・・

やっと心を落ち着かせることが出来て

博士も大事に至らなかった・・・って言っても

カスリ傷程度だったんだけど

それにしても、こんな時間に誰かしら？？

『もしもし、哀ちゃん？？』

「・・・蘭さん？？」

『・・・助けて！！哀ちゃん！！』

「どうしたの！？」

『実は、ウォッカっていう人に捕まっちゃって。』

「大丈夫？？」

『うん。なんとか平気みたい。』

「・・・で、ウォッカは？」

『今・・・寝てるわ。』

人質を取ったのに、寝るバカなんて・・・

ウォッカしかない!!!

哀は心の底からそう思った

「・・・どこにいるの?」

『廃ビルよ。多分だけど米花公園のすぐ近くにあるわ。近くに砂場が見えるの。』

「・・・抜け出せない?」

『手は自由だけど、ちょっと立てなくて。』

「え・・・?」

『足をロープで固定されちゃ・・・ッ!!!!!!』

「蘭さん!」

ツーツー

受話器の向こうから聞こえる機械音に

こんなにもドキドキしたことがあるだろうか・・・

蘭さんが・・・蘭さんが危ない!!

だって・・・ウオツカって・・・女子高校生好きそうだし!!

なぜかポジティブ? な哀ちゃんでした・・・

R R R R R R・・・

「はい。」

『灰原、そっちに蘭いねえか??』

「やられたわ。」

『え?』

「ウオツカに・・・誘拐されたの。」

『!?!?』

「場所は断定できないみたいだけど、米花公園の近くの廃ビルみたい。」

『・・・くっそお、ウオツカの奴。』

「助けに行くんでしょ???」

『当たり前じゃねえか。』

当たり前

そうよね、江戸川君が蘭さんを助けられない訳が無い

助けなかったら・・・江戸川君じゃないものね

「私は・・・どうすればいい？」

『とりあえず、博士の家にジョディ先生を呼ぶから一緒にいろ。』

「あなた・・・一人で行くの??」

『まあな。』

「無茶よ!! ああ見えても・・・ウオツカは柔道が強いだよ。」

『俺には博士の機械メカがあるから。』

「けど・・・。」

分かってる

何を言っただって彼を止められないことくらい

分かってる

彼が本当に強い人だってことくらい

けど・・・不安なの

もし、江戸川君までいなくなっちゃったら私・・・

『安心しろ。絶対帰って来るからさ。』

江戸川君の強い声が

私の胸をドキドキと鳴らす

「・・・・。」

『また変なこと考えてんのか？ お前の気持ち絶対・・・理解^{ワカ}ってるよ。』

「ええ、楽しみにしてるわ。探偵さん。」

『じゃあな。』

「気をつけてね。」

ツーツー

受話器の向こうから聞こえる機械音が

こんなにも悲しいことなんてあっただろうか

江戸川君、頑張っ
てね・・・

藍色の空に散りばめられた宝^{ホシ}石は輝いていた

15 疑惑（後書き）

奈津美です。

このお話・・分かりにくいですよね。

説明しますね。

●蘭はウォッカに誘拐された

●蘭は、ウォッカに足だけ固定された（笑

●携帯をかけている途中にウォッカが起きた

まあ、次で大体分かるかと思いますが

スランプキタ——（○、艸）●・艸・）○艸。●^艸^）

○＜艸＞——！！

とうとうきちゃいましたよ、b（・v・Më）のスランプ

スタンプじゃないですよ、スランプです（おい

なので、読みにくい点もいっぱい

あるかと思いますが、見捨てないでください（。、D（）エエエエ
エン

評価お願いします（○＊。——。）○ペコッ

16 危機

壁と壁の隙間からヒンヤリと冷たい風が入って来る

蘭は寒さと恐怖に身を震わせた

ウォッカの目が覚めてしまったのだ

すぐさま携帯電話を奪われてしまう

蘭はすぐに得意の空手でウォッカの頬を突く

ウォッカはよろめきながらも意識を失わない

いつもなら、誰でも失うというのに

“抵抗するならと殺すぞ”と脅されたので、渋々ながら手首をロープで固定された

ゾクゾクと寒気がする

気持ち悪い・・・助けて・・・新一

「お前もつくづく不幸だな。あんな奴らと仲良くしてるからこういう目に遭うんだ。」

不幸だなんて思ったこと無い

あなたの方がずっとずっと不幸よ

身をジタバタ動かして必死に抵抗する蘭

しかし、それも虚しくウォツカは蘭の足に手を伸ばす

「キヤアアアアアアア！！！！！！」

「静かにしろ!!」

「嫌！！触らないで！！変態！！！！」

変態 変態 変態

ウォツカの頭の中でグルグル回る文字

ウオツカは精神的にシヨツクを受けていた

そして、自分は変態では無いと言い聞かせて

再び蘭の足に手を伸ばした

「ツ!!!」

$$\begin{array}{c} R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \end{array}$$

その時、廃ビルに携帯の着信音が鳴り響いた

ウォツカはチツと舌打ちを打った後、電話に出る

『もしもし、蘭ねえちゃん!?!』

「よお、眼鏡の探偵ボウズ。」

『・・・ウォツカ、てめえどこにいるんだよ!?!!』

「さあな。廃ビルにいるってことしか教えられねえな。」

『・・・米花公園の近くか??!』

「・・・残念。大ハズレ。」

『何!?!』

コナン君だ・・・

きつと哀ちゃんから聞いて私を探しているんだね

ありがとね、コナン君

ねえ、新一・・・どこにいるの?!!?

助けてよ・・・新一

「助けてえ!!! 新一 いいい!!!」

『蘭? 蘭!!!』

「チツ・・・じゃあな。」

ピッ

無理矢理切られた携帯電話はウォッカの胸ポケットにしまわれた

蘭の目からは涙が零れていた

どんなに呼んだって、どんなに叫んだって

新一は来ないんだ

分かっていたのに・・・分かっていたのに・・・

どうして私は期待してしまうのだろう

「さてと・・・続けましょうかねえ。」

「止めてよ!!! 私に手を出したら・・・あなた後で殺すわよ。」

「ご忠告どうも、お嬢さん。」

ウォツカはポケットからナイフを取り出して

蘭に刃を向ける

蘭はギュッと汗ばんだ手を握り、希望^{ヒカリ}を求めた

夜更けの風は冷たく、まるで冬に戻った様であった

16 危機（後書き）

奈津美 「おはようございます♪」

コナン 「おい、蘭を放せよ。」

奈津美 「ウォッカに言ってよ・・・。」

コナン 「書いてるのはお前だろ!!!!」

奈津美 「・・・うるせえぞ。」

コナン 「!?!?今・・・こいつの化けの皮が・・・。」

変な会話です+。(＊'∀、)b+。ネツww

次はコナンメインなお話DÈ+。+、(＊'∀、＊)ノ+。+――

SII!――

17 推理

コナンは公園のベンチに腰を下ろしていた

蘭の声が頭から離れないのだ

砂場が見えるⅡ米花公園

では、その考えを変えてみるのはどうだろうか

おそらく、まだそう遠くには行つて無いはずだ

コナンは米花町内にある公園を一つ一つ考える

しかし、どこも近くに廃ビルなど無い

米花公園の近くの廃ビルが場所的にも条件にも当てはまっていたのだ

けれども・・・誰もいなかった

誰もいない寂しげなオフィスや受付や社長室などはあったのだが

肝心の蘭とウォッカはいなかった

隅々まで探したのだが、やはりいなかったのだ・・・

他に砂場がある所・・・！！

パッと頭に浮かんだ場所

「・・・そうだ、公園だけじゃねえ。」

探偵としたことが身近な物を忘れてしまうなんて

学校にだって砂場はあるじゃないか!!

コナンはすぐさま立ち上がり、公園から飛び出した

「コナン君!!!!」

「え・・・?」

「何やってるの??」

振り返れると、一家団欒イッカダンランという雰囲気カモを醸し出した歩美ちゃんがいた

「ちょっと、蘭ねえちゃんを探しているんだ。」

「あ、歩美見たよ。」

「どこで!!!!」

「4丁目の住宅街で、黒い車とすれ違ったんだ。その車に蘭さんが乗ってた!!」

「住宅街?？」

「うん。でね、近くの駐車場に入っていったよ。」

あそこには学校なんか無いはずだ

むしろ学校から遠いし……

公園だって、砂場だって……!!!!

「ありがとう、歩美ちゃん。」

「ううん……夜遅いから、気をつけてね。」

「ああ!!!じゃあな!!!」

歩美は下唇をキュッと噛み、笑顔で手を振った

返事はいつでもいい

そう言ったのは自分だというのに

何故、期待してしまうのだろうか……

「何でかなあ……。」

歩美はポタポタと零れる涙を拭いた

・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。

カタン

哀は、ジョディにコーヒーを出した

そして自分のコーヒーも作り少しずつ飲む

「ジョディ先生。」

「何かしら???」

「どうしてウォッカはこんなことしたのかしら。」

「・・・どうやらウォッカも捨て子だったみたい。」

「!?!」

「けど・・・親だって好きで捨てた訳じゃ無かったわ。」

「どういふこと?..?」

「・・・ジンから聞いたんだけど。」

・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。

「・・・ここだ。」

コナンは辺りをキョロキョロ見渡す

誰もいないことを確認し、そっと中へ侵入した

・・・頼む、無事でいてくれ

コナンは階段を駆け上った

―助けて、新一

何度も何度も聞こえる幻聴

俺は更に急いで駆け上った

17 推理（後書き）

ああ・・・分からない

分かりにくくてごめんなさい（○＊。―。）（○ぺコッ

もうなんで肝心な時にスランプ・・・

バカアアア○TZシヨボーン

評価感想待ってます（○＊。―。）（○ぺコッ

18 通報

「ハアハア。」

コナンは息を切らして、その場に座り込んだ
階段は更に上へ続いている

エレベーターがあれば楽だというのに

あいにく電気が来てないので、全くもって動かない
つまり、ただの箱ということになる

「あ．．．。」

ここは一応警察を呼ぶべきだろう

ずっと探していたウォッカが捕まえられるのだから

コナンポケットから携帯電話を取り出した

ピポパポ

RRRRRRR．．．

「はい、こちら捜査一課。」

『もしもし、目暮警部お願いします。』

いつもより子供らしさを出した口調で信頼できる人を呼ぶ

「わしだが・・・コナン君かね？」

『うん！！・・・実は、ウォッカを見つけたんだ。』

「何!？」

『まだ、断定はできないんだけど・・・場所は・・・。』

「分かった。すぐ向かうから、くれぐれも無理はせんように。」

『うん、分かったよ。それと・・・蘭ねえちゃんが人質に・・・。』

「何っ！！！！コナン君、頼むから無理はしないように。」

『分かったから。じゃあね。』

ピッ

「お前、このメイド服でも着ろ。」

「い・・・嫌よ!!」

「・・・しょうがない。」

ガッ

ウォツカは持っていたナイフで蘭の服を切り裂いた

蘭はガタガタと震えている

気持ち悪いよ・・・助けて・・・

どうして私がこんな目に遭わなくちゃいけないの??

どうして・・・??

「ふふふ・・・無理矢理にでも着させてやる。」

ウォツカがナイフで蘭のズボンを切り裂こうとした

新一・・・助けて

「・・・ッ。」

分かってる

あなたが大変な事件を背負っていることを

その事件がとっても難解な事件だということも

けどね、新一

それでも会いたいと思ってしまう私ってワガママなのかな??

ずっとずっと一緒にいて

私にとって新一は、一番近くて愛しい存在だったんだよ

ダメだよ・・・新一

私、新一がいないと元氣になれないよ

新一が私の全てだったんだよ??

どうして何も言わずにどこかへ言ってしまったの???

お願い・・・新一

無理なお願いだって分かってるよ

――助けて

ポタッポタッ

蘭の目から流れる大粒の涙

まるで宝石の様に輝いている

蘭は不安で満ち溢れた目をギュッと閉じる

愛しいあの人を来ることを望んで・・・

頬を伝う温かい物が不安を和らげてくれる気がした

18 通報（後書き）

ゞ（▽●）バンワデス（○、△）ノ

奈津美は、とうとうスランプを・・・抜け出せない

ああ・・・本当にゴメンなさい

蘭の感情が軽いと言われてしまいました○TZショボーン
本当に軽いですね・・・ゴメンなさい

評価や感想お待ちしております。

荒らしや中傷はご控え下さいませ（○＊。|。○）○ペコッ

19 訪問

ピンポーン

沈黙が流れている毛利探偵事務所に呼び鈴が鳴る

夜遅いお客様に小五郎は少しふくれっ面であった

ガチャ

ゆっくりとドアを開けると、ドアの前には小さなお客様

小五郎は目を丸くした

「お前・・・何で?？」

「・・・・・・・・コナン君は?」

「蘭を探しに行ったつきり、帰ってこねえんだ。」

「4丁目で、蘭お姉さんを見たの。」

「4丁目?？」

「真っ黒な車で寝てたよ。」

小五郎を頭を抱えて考える

真っ黒な車で寝ていた蘭……

もしかして、蘭は誰かに誘拐されたのでは無いか

小五郎は汗をダラダラと流し、小さなお客様に問いかけた

「そこまで案内してくれるか?」

「うん、案内する!!」

コナンも蘭も二人とも心配だ

だからこそ、探しに行こう

小五郎は、全ては自分の責任だと肩を落とした

しかし、小さなお客様が優しい笑顔を振りまくので

小五郎も、自然と笑っていた

「さあ、行くぞ。」

「……うん!!!!」

小さなお客様を連れて、小五郎は蘭の元へと向かう

キラキラと輝いた顔をして・・・

まるで、刑事だったあの頃の様に・・・

「ところで、お前の親は心配してねえか？」

「おじさんに呼ばれたって嘘ついて来た。」

「お前なあ・・・。」

少し呆れながらも、やはり子供の無邪気な笑顔には勝てない

怒る気持ちなんて消し去ってくれる・・・

少し冷たい風にあたりながら早足で向かった

・。・。　＋☆＋。　・。・。　＋☆＋。　・。・。　＋☆＋。　・。・。　＋☆＋。
・。・。　＋☆＋。　・。・。　＋☆＋。　・。・。　＋☆　　・。・。　＋☆

カタッ

静かに空になったカップを置く音が阿笠邸に響いた

哀は子供の様な瞳でジョディを見つめる

分かっていたのかもしれない

あの組織に集まる物の共通点を

けど、気づかないフリをしていたのかもしれない

自分は不幸だっはずっと思ってきたのに

他の組織員も同じ立場だったなんて考えたら

それが当たり前って思ってしまうかもしれないから・・・

こんなの、他の人には分かりっこ無いのよ

恵まれている人々に、分かって欲しくも無い

――親がいないという悲しい気持ち、もう会えないという悲しい気持ちなんて

「私も、良く分かるけど・・・けどね。」

「・・・簡単に言わないで。」

あなたも私と同じ立場

分かっている、分かっているんだ

けど、私の中の歯車が噛み合わない

「人の気持ちができるなんて簡単に言わないで。」

「哀・・・。」

こんな私なんて大嫌い

けど、そんなこと言ったらお姉ちゃんは怒るよね???

「・・・人を殺すのが、どんなに怖いか分かっていうの???」

セイギノミカタ
FBIに、分かる訳のない気持ち

さあ、あなたはどんな答えを出すかしら・・・???

庭の蕾はまだ開かない

19 訪問（後書き）

全然更新できなくてゴメンなさい（〇＊。―。）〇ペコッ

塾が忙しいのと、PCが一日1時間しか出来ないのと

もうてんてこまいてやつですd（。―。＊）ネッ！ww

けど、頑張りますので・・・

また読んで下さい（〇＊。―。）〇ペコッ

20 会話

「お前はずるい。」

ウォツカはナイフを落とした

蘭はホッとした表情でウォツカの表情を覗き込む

・・・泣いているの??

「どうして泣いているの??」

「・・・え？」

―どうして泣いているの??

ずっと昔にも、同じ様な顔して聞いてきた奴がいたな

妹のために一生懸命働いて、下っ端だったけど・・・努力していた

だから、兄貴もあいつのことを好きになったんだ

俺はずっとずっと兄貴といたから・・・

やっぱり・・・兄貴がいないとダメなんだ

本当は知っていた。兄貴が残酷では無く、心優しい人だと。

だからこそ、兄貴になら従えるって思ったんだ……

「話して欲しい。あなたの苦しみを。」

「……。」

「……ね?？」

「分かった。」

ウオツカは溢れ出る涙を拭い、蘭に打ち明ける

今まで誰にも本音が言えなかったけど

こいつなら言える気がした

あいつそっくりなこいつなら分かってくれる気がした……

・。・。+☆+。・。・。+☆+。・。・。+☆+。・。・。
・。・。+☆+。・。・。+☆+。・。・。+☆+。・。・。+☆+。

「……くっそ!!!!」

コナンは床にペタッと座り込む

どこを探してもいない・・・

住宅街にある、幼稚園の砂場

蘭が見たのはここだと思ったのだが

案の定、廃ビルはあったのだが・・・どこを探しても

蘭もウォッカもない・・・

検討外れって奴だ・・・

「探偵失格だな。」

小さくポツリと呟く

身体が小さくなってから、蘭をしっかりと守れたことがあっただろうか

むしろ、いつもいつも守られてばかりだ

いや、ほんの数回は守ってあげられたかもしれない

しかし、蘭に守られた回数の方が多い

「最低だな。」

好きな女一人守れない男なんて

最低だよ……

きつと蘭……今頃……ウオツカに……

けど、助けない方がもっと最低だもんな

「……行かなくちな。」

愛しいアイツを取り戻すために……

どんな凄いとこに隠れていたとしても

俺だけだろ?? お前を見つけれのは……

コナンは長い長い階段を駆け下りる

愛しいアイツの元に行くために……

冷たい風が、それぞれの思いを乗せて吹き渡る

あまりにも冷たくて、胸が苦しくなりそうだ

いつになったら・・・春が来るんだろう

いつになったら・・・花は咲くのだろう

20 会話（後書き）

・・・なんて分からない文章なんでしょうか。
俺だけだろ、見つけられるのは・・・

水辺線上の陰謀。このネタを書きたくて・・・w w
大好きなんですよ、あの映画・・・（'艸'）ムププ
新一顔赤いよ。バーロー夕日のせいだよ。みたいな
セリフが好きなんD E |。+、（*、∇、*）ノ。+。| S II。
！

あ、相変わらずスランプですが・・・
次話をもっともつと頑張ります（*・ω・）（*ーωー）ウン

文字の小さくする方法が分かりました。
ありがとう、こつぶさん O (≡ ∇ ≡ O) (O ≡ ∇ ≡) O

評価や感想、お願いします（O*。|。）Oペコッ

21 覚悟

全てのことを話し終わると、蘭は涙目でウォッカを見る

悪い人、だけど良い人

本当は優しいのに、それを表にだせない人

私はそう感じた・・・

「笑わないのか??」

「どこも笑う所無いじゃない。むしろ・・・悲しいじゃない。」

「けど、復讐を胸に生きる男なんて・・・」

「・・・あなたの両親は、本当に捨てたかった訳じゃ無いと思うの。」

「・・・?」

蘭は少し微笑んだ

ウォッカはゆっくりと蘭の手首のロープを解いたホド

しかし、蘭は逃げようともしない

ウォッカに攻撃もしない

むしろ、もっと話を聞こうとしている

「あなたは・・・愛されたかったの。」

「・・・。」

「あなたは、両親というものに愛されたかったの。」

「・・・。」

愛

俺が一番求めているもの・・・？

俺には理解^{ワカ}らないけど、当たっているのだろうか。

俺は、もう黒いけど・・・愛を求めているのか？？

「分からないかもしれないけど・・・きっとそうよ！..!」

「・・・ありがとな。」

蘭は勇気づけるように笑った

そして、ポンポンとウォッカの肩を叩いた

「・・・哀。私だって、大事なモノを亡くしたわ。」

「・・・。」

「けど、それは私が殺した訳じゃ無い。」

「・・・。」

哀は固く口を閉じた

何か、納得のいく言葉が欲しい

・・・いいえ、正式に言うと

私の傷口を塞いでくれるような、温かい言葉が欲しい

パツクリと開いた心の傷

お願いだから、言葉を下さい

もっと、強くなれる様な言葉を下さい・・・

「けど、私は覚悟した。自分一人で生きていくって。」

「・・・。」

「・・・実際、一人じゃないけどね。」

一人なんかじゃない、仲間がいる

分かってるつもりでも、やっぱり寂しいのはなぜ???

彼の心が、私に向いていないから???

「ねえ、哀。仲間がいる。それだけで幸せじゃないの??」

「え?」

「笑ったりできること、それって幸せじゃないの??」

「・・・。」

「人殺しの気持ちなんて分からないし、分かりたくもない。けどね、あなたはそんなことを背負いこむ必要無いわ。」

「・・・ジョディ先・・・生。」

「あなたは、一人じゃない。あなたは、前を向いて生きていければいい。」

それが、精一杯の償い

殺^{アヤ}めてしまった人々の分まで一生懸命に生きる

気がつけば涙が溢れていた

どうして私はこんなにも弱いのかなあ??

お姉ちゃんは、とっても強かったのにね・・・

「ツ・・・ツ・・・。」

「泣かないで、哀。泣いても罪は償えない。」

「・・・ひつく・・・ひつく。」

「あなたは、もう・・・あの頃のあなたじゃないの。過去じゃなくて、今を生きて?。」

過去に囚われてはいけない

哀はポロポロと涙を零す^{コボ}

お姉ちゃん、私ね・・・強くなれるかな??

お姉ちゃんみたいに、心優しい人になれるのかな???

—志保、もう・・・泣かなくていいの。笑って???

空耳かもしれないけど

今、確かにそう聞こえたんだ

その言葉で、私はスッと立ち上がる

そして・・・今までしまいこんでいた物を取り出す

「哀、それは何??」

「・・・解毒剤よ。」

「完成・・・していたの??」

哀は静かに頷いて、ジョディに向かって言う

「先生。私・・・彼にこれを渡す覚悟が無かったの。」

「・・・。」

「けど、今・・・やっと渡そうって思ったの。」

私に今までかけていた何かを手に入れることができた

そんな気がした・・・

ジヨデイはニツコリと笑いながら、電話をかけていた

哀は、誰にかけているのか気になっているようだ

ピッ

「哀。工藤君の家から、服を取ってきて。」

「え・・・？」

「いいから。彼の服を取ってきて。」

「・・・分かったわ。」

私は、先生が何を考えてるか全く分からないまま

急いで彼の家に行く

もちろん、鍵はしっかり持っている

「・・・待っててね、クールキッド。」

雲は流れ、黒が顔を出す

21 覚悟（後書き）

覚悟

この作品は、タイトルを漢字二文字と決めています。
なので、ちょっと悩みました。

けど、覚悟って二文字じゃん！！と思ひましてww

前回のお話で、水平線上の陰謀に誤字がありました。

是非探してみてください'エ。）。∴∴

冗談です。申し訳ございませんでした。

ああ・スランプから抜け出せません

頑張りますので、よろしくお願いします（o*。|。）oペコッ

17..55 読者数 3342でしたあゞ（≧▽≦*） //

22 志保

―車内

哀とジョディは、車でコナンの元へ向かう

哀は解毒剤の入ったケースをギュッと抱きしめる

この中に、入ってる解毒剤は2つ

それは、彼の分と……

しかし、私は戻っても……友達もないし……

このままでいれば、あの子達がいるし……

「哀、何を悩んでいるの?？」

「悩んでないわ。彼が戻れると思うと……少し寂しいの。」

登下校から、彼の声、彼の温もり、彼の姿

全てが消えてしまう……

学校の生活からも、普段の生活からも……

ずっと愛しいと思っていた彼が居なくなってしまう

そんな日々を過ごす覚悟や勇氣はあるのだろうか??

私は、そんな強く生きていけるのだろうか

もちろん、工藤新一としての彼には出会えるけど・・・

必ず、蘭さんも一緒にいるであろう

幸せそうな二人を見るほど、強くないし、傷つきたくもない

どうしてこんなに弱くて情けないんでしょうか

「ええ・・・寂しいわね。けど、普通の生活に戻ったのよ。」

「そうね、私があんな葉さえ作らなければ“江戸川コナン”は生まれなかったのね。」

「・・・こんな言い方無いけど、私はクールキッドに会えて良かったって思ってる。それはきつとみんなもそうだし・・・これで良かったんじゃない??そりゃ、彼にとっては良い迷惑だし・・・彼の大切な日々を削ってしまったという罪もある。けど、彼だって小さくなっているの思い出が出来たと思うの。」

「・・・先生。」

「だから、自分を責めないで。哀。」

「・・・哀じゃなくて志保。」

「え？」

「先生にはそう呼んで欲しいな。」

哀は甘え口調でジョディにそう言った

こんなこと・・・恥ずかしいから誰にも言っていなかったけど

哀。じゃなくて、志保。って呼んで欲しかった

もちろん・・・少年探偵団のみんなにも・・・

江戸川君にも・・・

「本当は、みんなにそう呼んで欲しい。・・・違う??」

「それは・・・。」

哀は顔を真っ赤にして、俯く

なんだか分からないけど、急に顔が熱くなった

恥ずかしかった・・・のかしら？

「誰だってそう思うわよ。本当の名前で呼んで欲しいって。」

「・・・ジョディ先生の本当の名前は?？」

「え?」

「だって・・・FBIのあれ・・・受けたんでしょう?？」

名前を変えることが嫌で拒んだアレ

私は、吉田さんの言葉で拒む勇気が出たんだった

「・・・秘密よ。」

「・・・そう。」

一瞬見せた寂しげな表情を見逃すことは無かった

分かっていて。本当はジョディ先生だって受けたくなかったのよね
???

けど・・・受けざるおえなかったんでしょう?？」

「さあ、着いたわよ。」

「・・・あ。」

大きな廃ビルの近くに、江戸川君の姿が見える
近くに保育園がある・・・

きっと、彼は砂場をヒントにしてここを・・・
けど、蘭さんの姿はどこにもなかった

「哀。そこにある服を取って。後、その解毒剤も。」

「・・・分かったわ。」

哀は、ジョディに服を手渡して

ジョディの手のひらに、一粒の解毒剤を乗せる

「哀・・・行く？」

哀はブンブン首を横に振る

泣きそうだから・・・泣いてしまっただったから

「じゃあ・・・行ってくるわね。・・・志保。」

ジョディは哀を助手席に残し、一人でコナンの元へ向かった

志保。久しぶりに聞いた自分の名前の響きがとても嬉しかった。

これからもう、江戸川君と会うことは無いんだ・・・

バイバイ・・・大好きよ、江戸川君

哀は汗ばむ拳をギュッと握った

23 告白

「クールキッド、これに着替えて？」

「これ・・・俺の服。」

「いいから、そこのトイレで着替えて。」

ジョディは近くにある公衆トイレを指す

コナンは良く分からないがまま、自分の服を抱えて走った

そんなコナンをジョディは見つめる

そして・・・哀も

「・・・フゥ。」

人との別れはとても辛いもので

寂しさと悲しさばかりが募る

しかし、別れる直前には

楽しかった思い出達が、頭の中を駆け巡る

あんなことやこんなこと

まるで一冊のアルバムをめくるように……

悲しいのも、寂しいのも嫌だけど

それを乗り越えたことで何か得ることが出来るんじゃないか

ねえ……クールキッド

あなたは今、悲しいですか???

「お待たせ、先生。」

「あら、似合うじゃない。」

「冗談言わないですよ。」

Tシャツもジーンズもダボダボ

何十にも折って地面につかないようにしている

コナンはキョロキョロと辺りを見回す

「……哀はね。」

「・・・江戸川君？」

「・・・よっ。」

彼はまだ、“江戸川コナン”の姿であった

どうして・・・？？

どうして志保って呼んでくれてるの？？

哀はすぐに車の窓を開けた

「驚いただろ？？志保って呼んだこと。」

「・・・ええ、とつても。」

「こう呼ばれたかったんだろ？？ずっと・・・ずっと。」

「・・・そうよ。」

愛情こめて親がつけてくれた名前

大好きなの・・・この名前

人からみたら変な名前って思ったり、普通って思うかもしれないけど

私にとっては特別な名前なの

「言ってくれば呼んだのによ。」

「恥ずかしくて言える訳ないじゃない。」

「・・・志保。」

「・・・。」

真っ赤に染まる私の顔を見て

彼はくすくす微笑んだ

「・・・江戸川君。」

「・・・ん??」

今なら言える気がする自分の思い

たとえ実らぬ恋だとしても、後悔なんかしたくない

・・・お姉ちゃん、見ててね

「私ね・・・私。」

ドキドキドキドキ・・・

胸の鼓動が高鳴り、彼にまで聞こえてしまいそうだ

「・・・好き。」

「え？」

「あなたのことが大好きです。」

「志・・・。」

哀は志保と言いかけた彼の口を塞いだ

コナンは驚きを隠せないまま・・・目を閉じる

風が頬を撫でる————

23 告白（後書き）

哀ちゃんが哀ちゃんじゃなくなってしまう奈津美です。

なんかオリジナルキャラみたいになっちゃうんですね
馬鹿ですよね・・・すいません。

けど、コナン君のキスは奪っても平気かな？みたいな
あ、けどファーストキスではないんですね。

14番目で、してたからー（＊・ω・）（＊ーωー）ウン
はい、ごちゃごちゃですいません（〇＊。―。）〇ペコッ
後どれくらいで終ることやら・・・

終らせるのが寂しいんですね・・・。

けど、頑張ります〇（・、ω・）キュ！

評価お願いします（〇＊。―。）〇ペコッ

24 返事

ゆっくりと歩く道はとても長い

こんな時間じゃ車を借りることもできないので

歩くしか無かった

「おじさん、このビルだよ!!!」

「何い!!! こんな汚ねえ廃ビルに蘭が!？」

「・・・うん。」

「俺は蘭を助けに行く、お前はここで待ってろ。」

「うん。」

小五郎は猛スピードで廃ビルの中へ入っていった

小さなお客様は、周りをうろちようと歩いてみる

すると、なんだか見覚えのある顔がずっと遠くに見えた

・・・コナン君？

「・・・怒ってる？」

「いや、別に??」

「・・・そう。」

哀は気まずそうに俯いた

コナンは微笑んで、ドアを開ける

ガチャ・・・

「・・・最後だから、言うな。」

「・・・ええ。」

哀はシートベルトを外して、車から降りた

ドキドキドキドキ

まだ、胸が高鳴っている

人差し指で唇をそっとなぞる

まだ・・・温かい

「俺さ、すっげえ感謝してる。お前に・・・。」

「・・・。」

「だから・・・ありがとな?？」

「・・・私・・・そんな・・・。」

コナンはギュッと哀を抱きしめて、頭を撫でる

・・・恋心では無く、家族愛・・・のような物かな

けど、それでもお前を好きなのには変わりねえよ

本当にゴメンな、志保・・・

けどな、本当にお前は良い奴だったよ

クールでツンツンしてて可愛くないって思ってたけど

毎日毎日、一生懸命花を育ててて

まだ花は咲かないけど、いつかきつと咲く

その時には、きっとお前も成長できるんじゃないかな?？

「じゃあな、志保。」

「さようなら・・・。」

「それと・・・俺はやっぱり蘭のこと・・・。」

「いいえ。いいのよ。」

コナンはジョディから受け取ったケースを開ける

そして・・・解毒剤を指でつまんだ

「・・・コナン君!!!!!!」

「歩美ちゃん!?!」

「ハアハア・・・。」

そうだった

俺にはもう一つやり残したことがあったんだ

彼女を傷つけるかもしれないけど・・・

言わないよりは、ずっとずっとましだよな??

「・・・俺、歩美ちゃんの気持ちに・・・。」

「分かってるよ。コナン君。」

「・・・え？」

「コナン君が、好きな人いるってこと。」

「歩美ちゃん・・・。」

歩美はギュッとスカートのすそを握る

分かってたんだ、叶わない恋だってことくらい

けどね、望んでたのかんもしれない

心の底で、この恋が叶うことを————

「だから、もういいんだ。」

「・・・ごめんな。」

「謝らないで、歩美・・・泣いちゃうから。」

やはりまだ1年生

初恋の苦さや失恋の辛さは理解^{ワカ}らないかもしれない

けど、悲しいことくらいは分かる

フラレちゃったんだよね、歩美・・・

けどね、コナン君のことは大好きだよ

それが伝わったのならもういいよ・・・

「・・・今ね、おじさんが蘭お姉さんを助けに行ったんだ。」

「・・・え？」

「だから、もう安心だね!!!!」

歩美はすぐに話題を切り替える

すると、コナンの表情はみるみるうちに暗くなってゆく

まずい・・・このままじゃおっちゃんも人質に

コナンは俯く顔を上げて、笑ってみせた

「・・・志保、歩美ちゃん・・・じゃあな。」

「ちょ・・・江戸川君!?!」

コナンは二人の目の前で解毒剤を飲み込んだ

歩美はコナンの元に駆け寄る

哀はジッとコナンを見つめている

涙を堪えながら・・・ジッと

ドクン・・・ドクン・・・

「うわあああああああ！！！！！！！！！！」

月が見ている

24 返事（後書き）

はい・・・またゴチャゴチャです
何で歩美の前で戻るんだよって方。

コナンは、歩美に自分の本当の姿を見せたかったんで
勝手な考えで申し訳ございません。

評価や感想お願いします。

ここから←は、サンデーのネタばらしです。

赤井秀一、亡くなってしまいました。

本当に泣きそうになりました・・・。

てつきり、身代わりだと思っていたので

けど、天国で明美さんと幸せにやっているかな？なんて
水無さんを本当に憎みました。

分かってるんです。CIAの仕事だって・・・けど

どうしても許せなかったです・・・。

赤井好きな人にはショックだったかと・・・

あ、こんなずらずらとすいません。

ではではβ y ē β y ē・・・φ（・ω・＊）

25 対面

ジョディは廢ビルを見上げる

もう、誰も傷つけはしない・・・

自分に何度もそう言い聞かせている言葉

「・・・。」

スツと目をつぶると、出て来るのは愛しい父の顔

ジョディはすぐに目を開けて、唇をキュツと嚙んだ

思い出したいけど、思い出すのが怖い

何でだろう・・・いつからこんなに弱くなったのかな？？

いいえ、きっと弱い自分を出さなかっただけ

「馬鹿。」

ジョディは、とりあえず戻ろうと歩きだした

漆黒の空に浮かぶ星を掴もうと、腕をのばしてみる

小さい頃、最愛の父と一緒に捕まえようとした星^{スター}

捕まえられないって知ってたのに、私を肩車して

捕まえてごらんって笑ってくれたの・・・忘れてないわ

愛しい人って、失ってから大切さに気づくのよね

ねえ・・・哀・・・いいえ、志保

あなたは、きっと・・・失うのが怖かったんでしょう??

分かるの、その気持ち

けどね・・・相手のことを考えると

あなたは自分の考えや思いを心の底にしまっってしまうのよね??

・・・それは、あなたにとって長所でもあるし短所でもあるのよ

「先生。」

低い男の人の声

ジョディは、顔をパツと上げた

「先生、初めまして・・・かな?? 工藤新一です。」

「・・・クールキッド??」

一躍有名人だった彼

突然行方を晦ましていた彼

その彼が目の前にいる

なんだかとても不思議な気持ちになった

「・・・歩美ちゃん。」

「・・・こんばんわ、新一お兄さん!!」

新一は、歩美と固く握手を交わした

歩美は、納得をしたような表情でじっと新一を見つめている

それから、哀の頭をくしゃくしゃに撫でる

「よ、志保。」

「久しぶりね、工藤君。その姿、見たかったわ。」

多少、棘トゲのある言い方だが

彼女なりの精一杯の言葉

おめでとうって言えない、素直じゃない彼女なりの言葉だった・・・

そんな中、歩美は新一を見つめながら

「新一さん、蘭お姉さんを助けてあげてね?？」

「・・・おう!!任せとけ!!」

「後ね、小五郎のおじさんはここじゃないビルに行ったよ。」

「え?」

「なんかね、マンションがいっぱい立ち並んでる近くにある廃ビルだよ。」

マンションがいっぱい立ち並んでいる

蘭が見た砂場

学校でも公園でも保育園でも無い

もちろん、幼稚園も探してみたが近くに廃ビルは無い

新一は、目を閉じて考える

「・・・！！！！何で気づかなかったんだ！！」

「クールキッド、車に乗って！！」

ジョディは一足先に車の運転席に乗り込んでいた

続いて哀が助手席に乗り込む

俺は歩美と二人で後ろ座席に乗り込んだ

蘭とおっちゃんの無事を願い、車は走り出す

蘭のことだから、平気だろうって思ったけど

手足を固定されてたりしたら、いくら蘭でも・・・

新一は汗ばむ手を見つめる

スッ

小さく細い手がそっと上に重なる

「新一さん。歩美は、二人に幸せになって欲しいんだ。だからね、

絶対助けてね?？」

「・・・そうだな。頑張らなきゃな。」

新一はニツコリ微笑んだ

少しばかり空が、微笑^{ワラ}っている気がした・・・

25 対面（後書き）

はい、こんにちは

今月末テストな奈津美ディード。・c | , ' . 。) ース!!!!

はいはいはいピンチですよピンチ。

けど、午後から頑張ります。(。ー△ー)ニヒ♪

話ごちゃごちゃですいません

次からは、小五郎が出てくるかと

評価、感想お願いします(○*。|。)(○ペコッ

26 協力

ハアハア

荒い呼吸が震えている

どうしてだろうか

娘が無事じゃないかもしれない恐怖感が小五郎を襲っている

それに、元刑事とはいえやはりもう体力は落ちている

おそらく、さっきコナンが上った別の廃ビルよりずっと高い

額から滴る汗

「・・・蘭・・・蘭・・・。」

蘭には、ずっとずっと寂しい思いをさせた

英理がいなくなってから、時折涙を流していたことは知っていた

何度も何度もあたられた

『お父さんのせいでお母さんは!!!!!!』

しかし、俺はどうすることもできなかった

時々蘭と英理は会っていたけど

やっぱり、毎日いたいって思いが強く

何度も俺に仲直りさせようともしていたが

お互い意地を張ってるもんだから、そう上手くいく訳が無い

・・・俺じゃなかったんだ

蘭を笑顔にさせてあげることができるのは

生意気な高校生探偵の新一だったんだ・・・

「くそッ!!!」

小五郎は急いで階段を駆け上る

嫉妬かもしれねえ

高校生の探偵ボウズに嫉妬するなんて

情けねえかもしれねえけど・・・

自分よりたくさん蘭のことを笑顔にさせてる蘭が

羨ましくて、羨ましくて

何度自分を責めたことか分からない

「お父さん・・・？」

「蘭！？」

蘭の隣に男が一人

おそらく誘拐犯であろう

ポロポロと涙を流す蘭を見て

無償に腹が立った俺は、誘拐犯に飛び掛った

「てめえ・・・よくも俺の娘を・・・。」

「悪いな。俺にも色々あるんでね。」

「お前・・・許せん！！！！！！」

「止めて！！お父さん！！！！」

娘の一言で動きが止まる

「この人は、悪い人じゃないの。」

「し、しかし・・・お前・・・泣いて。」

「安心しちゃって・・・。」

「・・・そうか。」

小五郎は蘭の頭をなでた

何度も何度も・・・

温かい手のひらが心地良い

こんなに手のひらって温かいっけ??

ううん、きっとお父さんだからかな???

「・・・お父さん、ゴメンね。」

「え?」

「ううん、昔のこと思い出しちゃっただけ。」

きっとあの言葉のことだろう

小五郎は優しそうな微笑みを見せて、蘭に背を向けた

「俺じゃないもんな、お前を助けるのは。」

「・・・お父さん？」

「おい、そのサングラス男！！お前は俺じゃない奴に殺させるといい。」

「・・・？」

「まあ、いい。じゃあな・・・蘭。」

「・・・うん。」

蘭は、なぜお父さんが私を助け出さなかったのか

よく分からなかったけど

決して、意地悪とかそういうんじゃないのは分かったよ

ありがとね、お父さん

「・・・おい、どうして毛利小五郎はお前を助けなかったんだ？」

「さあね。ただ、他の誰かが助けにくることを信じてるから。」

「逃げ出してもいいんだぜ？」

「ううん、警察が来るまでここにいるわ。」

「・・・ありがとう。」

「・・・あなたの頼みも聞いてあげたいし。」

ウォッカの頼みとは・・・両親と会うこと

会って、ある薬を飲ませること

ある薬が何なのか私にはよく分からないけど

今までかわいそうな目にあってきたんだから

両親に会うくらい・・・いいわよね

「・・・実は。」

26 協力（後書き）

意味不明ですいません。

なぜ小五郎は蘭を助けなかったのか

きっと何か考えがあるんでしょう。はい。

蘭は自分と何か似ているウォッカを助けたいと

思っていますが・・・

ウォッカは、あの菓を両親に飲ませたいと

思っていたのです

しかし・・・・・・・・・・・・・・・・

ああ意味不明でイヤイヤ”○（＜＞○）（○＜＞）○”イヤイヤ
またまたスランプかなあ・・・ネムイ（ゝ・ωゞ）

27 謝罪

ウォツカは頭を床につけた

「すまない・・・お前には嘘をついた。」

「え・・・？」

「本当は、3年前に事故で亡くなったんだよ・・・二人とも。」

「・・・事故??？」

ウォツカは少し震えた声で話し始めた

頭を床につけたままで・・・

「よっぽばらい運転の犠牲者だよ。笑っちゃうよな。二人で歩いてたら突然だってよ。」

「・・・あなたは、知ってたの？」

「・・・あそこに見えるマンションに住んでたんだ。あいつら。」

「・・・だからここに來たの？二人を思い出すために??？」

「ああ、まあボスから聞いたから本当のことか分からないけど。」

思い出なんか無い

写真でしか見たことの無い二人の顔

二人は幸せそうに笑ってて、俺なんかいなくても平気だったんだ

そうだけど、もしかして・・・なんて期待してたんだ

一緒に住めるかもしれない・・・なんてな

馬鹿だよな、捨てた奴なんかと一緒に住める訳ねえじゃん

「ウ・・・ウ。」

「泣かないで?? きっと二人もあなたのことを忘れて無いと思うの。」

「・・・ツ・・・。」

「あなたは、やり直せる。だって、心優しい人だもの。」

光にあたるのは、心地よい

けど、中にはそうじゃない人もいるよね??

・・・大丈夫、怖くない

だってみんな楽しそうに笑えてるもの

「・・・ごめん。」

兄貴、俺はいつになっても弱い俺だったんだ

兄貴がいなくちゃ何にもできねえ俺だったんだ

情けない、情けない

菓を両親に飲ませようとしたんじゃない

自分で飲んで、生まれ変わりたいと思ったんだ

透明クリアな自分に戻りたかったんだ――――

「・・・俺、罪を償う。」

「・・・ええ、頑張ってね。」

タッタッタツ

階段を駆け上る音が廃ビルに鳴り響く

誰、誰がいるの??

「蘭ああああん!!!!!!!!!!!!!!」

「・・・え?」

聞き間違えで無いのなら

単なる空耳で無いのなら

間違えない、今の声は——

「新一!?!?!?」

高校生探偵、工藤新一

私のかげがえのない人

私の愛する人・・・

ドスッ!!

「・・・ぐっ。」

「・・・え??!?」

私の後ろから鈍い音が聞こえる

ドキドキドキドキ

蘭が振り向くと、血まみれなウォツカが倒れていた

「キャアアアアアア！！！！！」

罪を償う

それは、死ぬということなんでしょうか・・・？

27 謝罪（後書き）

ああ・・・またごちゃごちゃ

すいませんすいませんすいません

起承転結なんて無視しすぎ（、△、∪；）

ごめんなさい、評価お願いしますm（
—” m（ペコリ

28 終止

今まで、俺は何をしてきたのだろう

今まで、俺は何を見てきたのだろう

俺は、関係ない人まで殺して

そいつらの死体を見て、満足してた

ああ、今日も仕事が片付いた・・・って

なんてひどいことをしてしまったんだろう

このナイフで、自分の腹を刺したなら

刺したなら・・・楽になれますか???

刺したなら・・・罪を償えますか???

いっそ、死んでしまおう

もしかして、アノヨ地獄で両親に会えるかもしれねえ

お互い、罪人なのだから――――

「しっかりして!!!!!!」

「……………」

ウォツカは、ハアハアと粗い呼吸を繰り返す

新一は泣きじゃくる蘭に問いかける

「蘭、一体何があったんだ!？」

「分からない……分からないよお……」

蘭は新一の胸にすがりついて、泣いた

目の前で人が苦しんでいるというのはやはり辛いものだ

さっきまで、両親に会いたいと言っていた彼

できることなら会わせてあげたかったよ……

「そろそろ、目暮警部が来るからな??大丈夫だから。」

「新一……会いたかったよお……ずっと……ずっと。」

「ゴメンな、蘭。もうどこにも行かないから。」

「……うん。」

新一は蘭の頭を何度も撫でて、肩を抱き寄せた

すっかり冷え切った蘭の体

俺はずっと離したくなかった

。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。

「あの男は、助かるか分からない。けど、全力を尽くしてもらおうさ。」

「ありがとうございます、目暮警部。」

その後、目暮警部達が来てウォッカを外に運び出した

すぐに救急車に乗せ、病院へと運ばれた

蘭の誘拐騒ぎは、こんな結果で幕を閉じてしまった

目暮警部にある調査を頼み、俺達はその結果を待った

「ねえ、新一。どうしてここが分かったの??」

「砂場だよ。」

「え・・・？」

「ほら、マンションってさ下に公園あるじゃん。」

そう、マンションやアパートの下には

よく公園が付いてるんだよな

歩美ちゃんの証言で、このことに気づけたよ

「そうじゃなくて、どうして砂場ってヒントを知ってるの?？」

新一はしまった・・・という顔で蘭から顔をそむけた

蘭は何でだろう?と頭を抱えている

「らああああん!!!!!!!!!!」

「あ、お父さん!!!!!!!!!!」

小五郎は蘭を抱き寄せて、大声で泣き続けた

なぜかその姿を見ると、涙が出そうになった

本当に良かった・・・

「クールキッド！！！！・・・じゃなくて新一！！」

「ジョディ先生！！」

マンションの駐車場から、聞こえる声

たくさんたくさん、迷惑をかけたけど

あなたは決して、怒りもせずに協力してくれましたね。

感謝してます。本当に・・・

「毛利さん！！無事で良かった！！！！」

「先生！！ありがとうございます。」

二人は幸せそうに笑った

元教師と生徒とは思えない場の雰囲気であった

「工藤君。」

「志保！！」

新一は哀の頭をくしゃくしゃに撫でる

こうすると、自分が元に戻れるって実感できる

そうすると、志保への感謝の気持ちは更に募る

「本当にありがとな、志保。」

「いいえ。そんな・・・。」

「ちょっと新一。いつからそんなに哀ちゃんと仲良くなったの??」

「え・・・っと。」

「私達、実はメル友なんだ!!江戸川君に教えてアド教えてもらったの♪」

まるで、女優アクトレスのような演技力を見せる哀

新一はアハハと苦笑した

「へえ・・・そうなんだ!!で、哀ちゃん・・・コナン君は??」

忘れてたあああ!!!!!!

コナンがいないこと・・・どう説明しよう

俺がコナンだってばれたら・・・今までのことが

そう、新一がコナンの頃・・・色々あったろう

例えば、蘭がコナンに新一への好意を話したり

蘭と一緒に風呂に入った・・・などなど

「さあ。新一お兄ちゃんにでも聞いてみて♪」

「おい！！！！」

「あー！！！！新一何か知ってるのね！！」

「知らねーって！！」

「待ちなさい新一ー！！！！」

夜もすっかり更けている

こんなに幸せなのはなぜ？？

やっぱりコナンじゃなくなったという事実

嬉しいけど、悲しい

・・・けど、蘭がいるから

この姿で、蘭といることが出来るから

本当に幸せなんだ———

蘭、愛してる

この気持ち、いつかお前に伝えるから

月が照らす、眩^{マバユ}い光で・・・

28 終止（後書き）

終止。

本当は終止符が良かったんですけど

二文字でそろえてきたんで＋（★\$-V-艸）＊-♪

なんか最終的にこのような形をとりました。

中途半端で終わらせて、あとはエピソードを数個入れてこの話は終わり。

宝物に集中できます。

希望。は挫折しようかな・・・

病気の知識がないのに、これを書いたら

読者さんに間違った情報を伝えてしまいそうなので

すいませんm（――” m）ペコリ

これからの内容は

蘭と新一

哀

ウォッカ・ジン

まあ、後は未来でおしまいかな??

評価お願いしますm（――” m）ペコリ

エピソード 1

目の前が真っ暗だ

ここは一体どこだろう

今まで感じたことの無い世界・・・

「ウォッカ。」

いつもいつも聞いていた声

どうしてこんなにも懐かしいんだろう

「目を覚ませ。」

目を開けたいけど、瞼がとても重い

何でだろう・・・

ああ・・・もしかして本当に死んだのかな？？

そしたら、アイツラ両親に会えるかな？？

「目を覚ませ!!! ウォッカ!!!」

けど、死んだって罪は償えない

殺してしまった人の分まで精一杯生きる

これがせめてもの償いなのでは無いだろうか

「・・・あ・・・。」

力を振り絞って声を出す

「あ・・・に・・・。」

最後の一文字が出ない

「ウォッカ!!!! しっかりしろ!!!!」

「・・・あ・・・に・・・き・・・。」

俺は、目をパツと開く

目に眩い光がたくさん入ってくる

ここは一体どこだろう・・・

「ウォツカ・・・。」

「兄貴！！！」

ウォツカは重い体を起こそうとする

がしかし、腹に激痛が走る

「無理するな。」

「・・・ここは？？」

「警察病院だ。」

「兄貴・・・俺。」

「何も言うな。誰だって親が恋しくなる。当たり前のことだ。」

「兄貴・・・。」

あの頃とは違う兄貴がいる

優しい瞳。思いやりのある言葉。

美しい金髪が短くなっている

けど、今の兄貴の方がずっとずっと良い

「それとこれ、工藤新一から。」

「・・・え？」

あの探偵ボウズ、元に戻ったのか・・・

そっか・・・まあ、これで良かったんだよな。

新一からの贈り物は、茶色い紙袋だ

とてもギッシリ物が入っている

俺は早速封を開けた

「・・・手紙。」

あて先不明の手紙が何通も入っていた

正式に言おうと、何十通も

手紙をすぐに開くと、綺麗な字でたくさん書かれた文字

「えっと・・・!？」

一番上に書かれている言葉

「捨ててしまった子へ・・・。」

「そう、それはお前の両親がお前に書きとめた手紙だ。」

手紙というより、たくさんの言葉

ごめんなさい、すいません、頑張ってますか？

届く訳無い手紙を俺のためにこんなに・・・

「お前の親、借金が苦しくてな。それで、お前を捨てたんだ。」

「・・・え？」

「自分達と同じ不幸を味わって欲しくなくてな。」

最後の手紙に書かれていた言葉

『自分達と同じ目に遭うのならば

この子だけは幸せな家庭へ

例え、一生会えなくとも

私達は血がつながっている・・・。

今でもあなたを愛してします・・・。』

ポロポロと涙が零れる

あの女が言っていたことは本当だったんだ

会いたかった

会いたかった・・・

「ウォッカ。まだやり直せる。二人で頑張ろう?」

「・・・兄貴。」

病室の窓の外から見える青空

この綺麗な空が見れて本当に良かった・・・

この罪を償うにはたくさんの時間がかかるけど

こんなにもたくさんの光があるのならば乗り越えられる

・・・いつか、俺も咲けるかな???

まだ、蕾のような俺だけど

いつか、花になれるようにがんばるから・・・

シェリー、ゴメン

俺、本当に最低だったな・・・

けど、お前には幸せになって欲しい

「じゃあ、俺はとりあえず帰るな。」

「・・・はい。」

「じゃあな、また明日来るから。」

一瞬見せた兄貴の笑顔

もっと頑張れる気がしてきた

俺はもう一度目を閉じる

明日目覚めたら、きっと隣には兄貴がいる

そう思ったら安心して眠れた・・・

今まで、たくさんの罪を犯した俺だけど

これからは、一步一步進んで行きたい

前を向いて、ゆっくり一歩ずつ

そうすればきっと、到着地点ゴールが見えるから・・・

だから、俺は歩く

希望を求めて・・・

エピソード 1 (後書き)

なんだかまとまりのない話で終わりました
けど、この二人はこれでおしまいってことで
次は新一と蘭 D E | 。 + . 、 (* ' ∇ 、 *) ノ 。 + . | S II
実はもう書きあがってます。

まあ、後ほど + (★ \$ | V | 艸) * | ♪

エピソード 2

―5月中旬

あの事件から、かれこれ一週間経った

私は、いつもと変わらない日々を過ごしている

ただ、一つ変わったことがある

それは、アイツが帰ってきたこと……

ピンポーン

「……遅いなあ、新一。」

今日は久しぶりに、二人でトロピカルランドに行くことになった

新一は、帰ってきたからといい

マスコミ、雑誌の出版社、たくさんのファン

に追われおわれて多忙な日々を過ごしている

もうすっかり温かくなった

とはいえ、まだ半袖では肌寒い時期である

ピンポンピンポンピンポン！！！

ガチャツ！！

「うっせーな！！一回鳴らせば分かるっつーの！！！」

「だって、もう待ち合わせ時間過ぎてるのよ！！」

「しょうがねえだろ！！寝坊しちまったんだから。」

「しょうがないじゃない！！」

こんな風に口げんかできる日々にも感謝しなくちゃ

一日ってあっという間に終わっちゃう

だからこそ、本当に時間に感謝しなくちゃ・・・

「ありがとね、新一。」

「え？」

「帰ってきてくれて、本当にありがとう。」

「・・・ああ。」

蘭があまりにも可愛く笑うから

俺は多分顔が真っ赤になっていたと思う

けど、俺も嬉しいよ

今まで、お前を見上げることしか出来なくて

すごく歯がゆい思いをしてきた

本当にありがとう・・・志保

あれから一週間、俺はあいつに会ってない

一体何をしているのだろうか・・・

「行こうぜ、蘭。」

「う、うん。」

蘭が手をモジモジ動かしている

何がしたいのかよく分からないから

とりあえず腕を引っ張った

「あ……。」

「ん??? 手の方が良かったか???」

蘭は顔を真っ赤にする

そうだな、もうずっと会ってなかったんだ

俺もお前にたくさん触れたい……

「お手をどうぞ。」

「……ありがと。」

蘭の手は、細くて綺麗で

こいつを守りたいって思った

まあ、俺が守られる側かもしれないけど……

手を握った時、幸せだって思えた

本当に、元の姿に戻れて良かった

「ねえ、コナン君。」

「何？蘭ねえちゃん・・・！？」

「やっぱり！！！！新一がコナン君だったの？？」

しまったあああ！！！！！！！！！！

コナンの癖で可愛く言っちゃったじゃねえかよ！！！！

気持ち悪い・・・自分で気持ち悪い・・・

やば・・・蘭の顔まともに見れない・・・

「え・・・あ・・・その・・・」

フワッ

蘭の長い髪が俺の頬に触れる

蘭は、俺の腕にしがみつく

「馬鹿・・・馬鹿あ・・・」

ポロポロと流れる涙はとても綺麗で

その時の蘭の泣き顔は本当に美しくて・・・

愛しかった

「ゴメン・・・ゴメンな・・・。」

「・・・実は、昨日・・・哀ちゃんから聞いたの。」

「志保に??？」

「え? 志保??？」

「え、あ・・・哀に??？」

「うん。黒ずくめの組織の人たちから私を守るために黙ってたんでしょ??？」

志保の奴・・・

「ああ。」

「・・・それ聞いて嬉しかったよ。」

「蘭・・・。」

「今日は本当に楽しかったな。」

「うん!!」

蘭を安心させるために繋がれた手

まだ、解^{ホド}けてはいない

いつ、告白をしようか・・・

「ら、蘭。」

「なーに???」

「え・・・つと。」

どう言えればいいかなんて考えてなかった

だから、自分の気持ちをそのまま伝えよう

そう思った

「蘭、俺はずっとずっとお前のことが好きだった。愛してる。」

「新一・・・？」

「本当は、ずっと蘭に寂しい思いをさせていた俺なんかがお前に告白なんかしていいのか分からない。けど・・・俺は本当にお前のことが好きで、ずっとずっと欲しかった。お前しかいない。お前以外は考えられない。世界中を回っても、お前以上の女なんていない。本当に愛してるから・・・。」

「・・・う・・・そ。」

「本気だから。本気で蘭のこと愛してる。」

「・・・信じられない・・・夢みたい・・・。」

「夢じゃねえよ。」

新一は蘭を抱き寄せ、そっと蘭の頬へキスをする

蘭はまた、涙を流す

本当にお前だけが好きで、ずっと元に戻りたかったんだ

こんな俺だから、なかなか言えなかったけど

やっと言えた・・・言うことができた

「・・・幸せ。」

「そうだな。」

「新一。私も新一のこと大好きだからね。」

「・・・サンキュ。」

蘭はゆっくりと瞳を閉じる

これって・・・まさか

おそるおそる、顔を近づける

ビクッと蘭の肩が動く

緊張してる

正直言うと、俺も心臓バクバクだけど

蘭も同じなんだ・・・

俺達って似たもの同士だな

俺は蘭の頬を両手で包み込む

頬へのキス

それとは違う緊張感が走る

「・・・好きだよ、蘭。」

そして、唇を重ねる

優しく優しく、けど強く強く抱きしめる

蘭は、俺だけの物だから

「フッフ・・・新一って結構積極的なんだあ。」

「え・・・。」

「けど、幸せだって思えて嬉しかったよ??」

「・・・ああ。」

照れくさかったけど、初めてのキスは

家から200メートル離れた道端でした

蘭の髪から良い匂いがして、離したくなかった

今日は、とりあえず俺の家に来ることになった

別に変なことしねーからなっ!!!!!! 多分・・・

他愛の無い話して終わると思う

けど、これからもこんな風に日々を過ごせるのなら

幸せだと思う

母さん、父さん・・・俺を生んでくれてありがとう

二人がいなかったら、俺はこの世界に存在すらしていなくて

蘭に会うことすらできなかったんだよな

おっちゃん、おばさん・・・蘭を生んでくれてありがとう

二人がいなかったら、蘭はこの世界に存在すらしていなくて

ここにいないことすらできなかったんだよな

「そういえば、最近哀ちゃんに会ってないでしょ?？」

「ああ・・・」

「昨日会った時も、元気なかったんだ。」

本当は心配だった

もしかして、なんかあったのか??

「新一、哀ちゃんのところ行ってあげて。」

「・・・え？」

「新一の方が仲良いんだもん。・・・ね？？」

志保

今、お前は何してる？？

今、お前は笑ってる？？

「・・・ゴメン蘭。俺、行ってくる。」

新一は家を飛び出した

エピソード 2 (後書き)

なんか甘甘で終わってしまいましたア。

次はシリアスめにしていくんで(＊、艸、)

なんか微妙ですいません m (| | ” m) ペコリ

エピソード 3

暗い家

いかにも寂しそうな雰囲気を醸し出している

今日、博士は確か・・・フサエさんとデートだから

志保は一人か

俺はこっそり庭から家の様子を覗く

しかし、あいにくカーテンが閉まっている

「・・・あ。」

俺がコナンの頃、育ててみれば？って言った花

綺麗な桃色の花を咲かせていた

良かった・・・良かったな、志保

「く、工藤君??」

「え?」

「・・・やっぱり。」

「志保・・・。」

志保は相変わらず綺麗な瞳を見せていた

けど、顔が青白く元気そうには見えない

それに・・・少しばかり痩せた??

俺は志保の頬を両手で包み込んだ

「馬鹿!! お前・・・ちゃんとご飯食ってんのか???ちゃんと寝てんのか???」

「・・・。」

「なんとか言えよ・・・志保。外にも出てないだろ???」

「外に出たら見ちゃうから。」

「え?」

「幸せそうなおなた達を見るのがどれほど辛いと思ってるの!!!!」

一筋の涙が頬を伝う

なんて綺麗な涙なんだろう……

「・・・私、苦しい。」

工藤君と蘭さんが、幸せそうに歩いてるのを見た

その場面が頭から離れなくて

ましてや、それが刃ヤイバのように胸へ突き刺さる

だって、大好きだったの

今でもこんなに大好きだもん

恥ずかしいくらい、あなたのこと想ってる

今でも、想ってる

「ゴメン志保。けど、俺は志保には幸せになって欲しい。」

「私は、あなたと幸せになりたかったわ。」

「・・・志保。」

こんなこと言いたくないけど

本音が出てしまう

止まらない、止まらない

口から想いがあふれ出る

「大好きなの……。本当に大好きなの……。!!」

哀は新一にしがみついて

子供のようにエンエン泣いた

まるで、大事なおもちゃが壊れてしまった幼児のように

新一は何度も何度も哀の頭を撫でる

「今は、あなたのことしか考えられない。けど、いつか見つけるわ。」

「ん？」

「私のことを好きになってくれるような人を。」

「それならきつと身近にいるだろ。」

「……。そうかしら。」

「きつとな。」

哀は涙でぐちゃぐちゃの顔で微笑^{ワラ}った

あなたは、今もこれからも

私が一番愛した人です———

ねえ、お姉ちゃん

私ね、恋しちゃったんだ

けど、フラれちゃった

・・・その人が幸せになることを

望んであげるのが一番だよね???

私・・・がんばるから

これからも見守って下さい

『志保・・・志保・・・。』

「お姉ちゃん・・・?」

工藤君の後ろにお姉ちゃんがいる

確かに、私はお姉ちゃんを見たんだ

工藤君はすぐに振り向く

けど、お姉ちゃんは消えなかった

「・・・志保のお姉さん？」

『初めまして、工藤君。』

「お姉ちゃん・・・？」

『志保。会いたかった・・・ずっと。』

「私もだよ・・・お姉ちゃん。」

お姉ちゃんはニツコリと微笑む

お姉ちゃんが幻覚なのか錯覚なのか幽霊なのか

そんなのどうでも良かった

ただ、お姉ちゃんに会えたという事実が嬉しくて

泣いた

泣くのは本当に悲しいし、辛い物

泣かないって結構大変なのね・・・

「お姉ちゃん・・・。」

『志保。必ず幸せになってね。お姉ちゃんの方まで生きてね。』

「うん・・・うん・・・。」

『工藤君。これからも志保と仲良くしてあげてね。』

「はい。約束しますよ、明美さん。それと・・・あの時、助けてあげられなくてゴメンなさい。俺がもう少し早く・・・謎が解けてたら。」

『それはもういいの。過去に囚われちゃだめよ。工藤君も、志保も。』

「・・・はい。」

志保はポロポロと涙を流していた

そろそろ別れだと感づいたのだろう

・・・人との別れというのはとても辛いことだけど

いつか、また会えるということを信じて欲しい

そうすれば・・・きっとどこかで会えるだろう

だから、泣きたいだけ泣け

気が済むまで、ずっと泣いてていいから

それまでずっと傍にいてやるから・・・

『そろそろ・・・限界かしら。』

「明美さん・・・。」

『工藤君、ありがとね?? さようなら。』

「さようなら。」

『志保・・・おいで。』

「・・・お姉ちゃん!!!!!!」

志保は明美さんに飛びついた

しかし、その姿に実体は無かったため体がすりぬける

明美さんは、志保の頭を撫でて笑った

『ゴメンね、志保。抱きしめることができなくて。』

「・・・うん。」

『こんなお姉ちゃんを許してね。』

「・・・好きだよ、お姉ちゃん。」

『私も・・・志保のこと大好きよ。』

明美さんの姿が段々と薄くなっていく

空気と同化していく・・・

「お姉ちゃん。いつかまた会おうね。」

『ええ、約束ね。』

「・・・うん、約束。」

明美さんは、最後に涙を流して

俺達の前から姿を消した

あれが夢だったのかどうかは分からない

ただ、床に明美さんの涙の跡が残っていた

志保はあれから泣き続けた

俺もそんな志保を見ていたら思わずもらい泣きしてしまいそうで・

それくらい、悲しそうに泣いていた

「ありがとう、工藤君。私はもう平気だから。」

「・・・そっか。じゃあ、俺帰るな。」

「ええ。」

「じゃあな、志保。」

「さようなら、工藤君。」

玄関のドアはゆっくり新一の手によって閉められた

ドアが閉まった瞬間、哀はその場に泣き崩れた

泣くことしかできなかった

こんな弱い私だけど、いつか私なりの幸せを見つけない

「頑張るね。」

誰もいない部屋でつぶやく

けど、なんかあの花が“頑張ってる”って言ってくれてる気がするの

あの花を見ると、心が癒される

もしかして、あの花はお姉ちゃんだったのかもしれない

あの花が咲いたから、お姉ちゃんが現れたのかな????

「・・・咲いてくれてありがとう。」

私に会いに来てくれてありがとう・・・

また、会おうね・・・

エピローグ 3 (後書き)

なんか暗くなりましたね

明美さんを出して欲しいというミニメールが一通

けど、死んだ人をどうやって??と悩みました

で、最終的にこのような形で書かせていただきました

哀ちゃんと明美の再会・・・

書いてるこっちが悲しくなりました

後、玄関で泣き崩れるシーンも書きたかったものです

あえて、濃く書かなかったのですが

新一視点ばかりになってしまってますいません

評価・感想待ってまあす○(＊＾▽＾＊)○～♪

エピソード 4

分かってたんだ。

自分が一番分かってたんだ。

コナン君は、蘭さんが好きで自分はただのお友達。

それを分かっていたのに、何に期待をしていたのだろう。

。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。

― 6月上旬

かれこれコナンがいなくなってから約1ヶ月経った。

誰もがコナンという存在が消えたことに悲しんだ。

しかし、いつまでも落ち込んでいる訳にいかない。

「雨か・・・」

梅雨時の外は大嫌い。

だけど、紫陽花アジサイが好きな自分は傘をさして外に出る。

紫陽花アジサイのピンクや紫、水色や白が自分に元氣と勇氣を分けてくれる気がした。

「歩美も紫陽花アジサイみたいになりたいなあ」

小さな少女はハアと大きなため息をつく。

さすがにもう泣いたりはしないけど、やはり悲しい。

わざと水溜りに入って一人で遊んでみたりする。

お母さんに買ってもらったピンク色の長靴で、水溜りを蹴る。

「あら、歩美ちゃん?？」

「あ・・蘭お姉さん」

蘭はいつもの様に優しい笑顔を見せる。

「何してるの?？」

歩美はそんな蘭を見ていたら、涙が出そうになった。

歩美の家には、誰もいない。

お父さんはお仕事で、お母さんはお買い物。

だから、一人で遊んでいるんだよ。

本当は一人って凄く凄く寂しいよ——

「これから新一の家に行くんだけど、歩美ちゃんも行く?」

「・・・うん!!!」

もしかして、このモヤモヤが晴れるかもしれない。

歩美はとびきりの笑顔で歩く。

けど、もしかして泣いてしまうかもしれない・・・。

「蘭お姉さん」

「何?」

「泣くのはいけないかな?」

泣くのはいけないのだろうか。

泣いてしまいたい時は、誰にでもある

けど、泣いたら自分の弱さを人に見せてしまう。

それって、決して良いことでは無いと思う・・・

「ううん、いけないわ」

「どーして？」

「そっちの方がすっきりするでしょ？私、泣きたい時は泣く！！
そうしたらね、前に進める気がするから」

「蘭お姉さん・・・」

「だから、歩美ちゃんも泣きたい時は泣いて良いの！！」

その言葉に泣きそうになったけど、泣かなかった。

泣くのは、もう少し後で。

本当に辛くなった時にいっぱいいっぱい泣いて、

いっぱいいっぱい前に進もう。

―夜

歩美は、届くはずのないコナンへの手紙を書いた。

ひらがなだらけで可愛い文章である。

いつもより何倍も丁寧に、気持ちをこめて書く。

「書けたあ!!!」

明日、新一お兄さんに渡すんだ!!

コナン君への手紙だよって、

コナン君へ渡しといてって・・・

歩美は、コナン＝新一だということを把握した上で、

コナンへの手紙を書いた

『コナンくんへ

あながいなくなってもう一か月たちました。

みんなさびしがってます。

けど、歩美がみんなにいつてあげる。

コナンくんは、げんきだよ

コナンくんは、がんばってるよって

それと

歩美にとってコナンくんはかけがえのない人。

コナンくんは、歩美のいちばんだいすきな人だよ。

おかあさんに教えてもらったえいごをかきます。

I c o n t i n u e l o v i n g y o u f r o m n o
w o n . . .

まちがってたらゴメンなさい。

じゃあね、またね。

歩美より
』

またね・・・コナン君。

いつか、いつかまた会えるといいね。

エピソード 4 (後書き)

次話で最終話になるかな？？

私、受験生なのでこれから投稿数が減ります。

まだ、最終話は一文字も書いていないので

頑張ります。…+(∞UωU●)+..。

メッセージくれた皆様、ありがとうございます。

最近、体調不良に悩まされていたなつですが

なんとカ回復したんで大丈夫です(★嬉+O∇o*)

これからも頑張ります(σ*ゝω・)gИë☆

歩美ちゃんの書いた英語

意味は・・・秘密です(*艸、)

最終話にでも公開すると思いますッ!!!!

今日で、15歳になりましたッ!!

メッセージくれた皆さん、。。。☆(*ーー)／♪了「力

”下♪＼(ーー*)☆，。。。。

蕾、読者数6000人突破&ライバルは中学生!?!、読者数1000人突破

本当に皆さんには感謝してもしきれません(★嬉+O∇o*)

エピソード 5

工藤君へ

見て、この庭。

あの時の花、こんなにたくさん増えたのよ。

私は、いつになったら咲けるのかな？？

。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
+ ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。
+ ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。 。 。 + ☆ + 。

―5年後―

コナンが新一に戻ってから、もう5年も経っていた。

もちろん、皆の外見は大人っぽくなり

新一や蘭はもう立派な社会人に成長していた。

「新一、今日もお客さんいっぱいだね」

「そうだな」

新一は、自分の家の一角を探偵事務所に使っていた。

自分の探偵事務所を作るのが昔からの夢だったのだ。

そして、そんな新一を蘭は彼女として支えている。

そう、彼女として――

「今日も忙しいね・・・」

「ゴメンな、どこにも連れてってやれなくて」

「ううん」

そんなのはワガママだってことは、

蘭だって把握していた。

新一は、毎日4、5時間しか寝れていない。

そんな新一に、遊びに行こうとかデートしようなんて

言える訳無かった・・・

ピンポン

またお客さんか・・・

蘭は小さくため息をついて、玄関へ向かう。

ガチャ

「あら・・・」

「こんにちはアー！！！！！！」

頭に響くほど大きな声で叫んでいるのは、

もう小6になった少年探偵団の

吉田歩美と小嶋元太と円谷光彦。

そして、その後ろには呆れたようにため息をつく

灰原哀。

「遊びに来たの??」

「そうですーす！！！！」

「どうぞ、あがって」

少年探偵団は、靴を脱ぎ

ワーと言いながら工藤邸を走り回った。

小6になってもちっとも変わらない。

もちろん、みんなの外見はとても大人だ。

歩美は、モテモテの美少女で

元太は、びっくりするくらい痩せて今はサッカークラブに所属。

そして、光彦は学年でも有名な秀才である。

哀は、結局元の姿に戻らなかった。

あんなに大人びた顔が更に大人びたのだから、

もうみんなからの人気者である。

「おいおい、おめーら・・・いい加減成長しろよ」

「もう6年生です!!!!」

「・・・ったく」

新一は苦笑いしながら、事件の資料に目を通す。

そんな新一を哀はジッと見つめていた。

5年経っても、やっぱり好き。

実は、数ヶ月前に光彦が哀に告白したのだが

哀はその返事を返せずにいた。

「工藤君、ちょっと良いかしら」

「ん？・・まあ、いいけど」

哀は、新一を別の部屋に連れて行く。

「お前、何かあったのか？？」

「・・ええ」

哀はたくさんさんの悩みを話す。

光彦からの告白。

他クラスの人からの告白。

デートに誘われたこと。

新一は哀の頭に手をのせた。

「志保は、どうしたい??」

「・・・分からない」

「告白って結構勇気いるんだぜ」

「知ってるわ」

「だから、そのままっていうのはひどいんじゃないか??」

「・・・そうね」

「自分のありのままの思いを伝えればいいんだよ!!」

「工藤君・・・」

「どうだ?? 参考になったか??」

「ありがとう、工藤君」

哀はニツコリと微笑む。

彼女もやっと小学生らしく笑えるようになってきた。

やはり歳月は人を変える物だ。

「さてと、俺は仕事の続きでもしよっかなあ」

「・・・ねえ、工藤君」

「ん?」

「そういうあなたも、何か彼女に言わなくちゃいけないことがあるんじゃない?」

「・・・蘭のことか」

「ええ、プロポーズくらいしてあげたらどう?」

「・・・ば・・・バーロお!!」

「私は、本気よ」

哀には分かる。

蘭の辛そうな悲しそうな表情が・・・

本当は、もっと工藤君の傍にいたいのに

仕事が多忙な彼にワガママは言えないんだ。

「・・・どういえばいいのかな?？」

「そうね・・・薔薇の花束でも贈ったら?？」

「・・・なんだよそれ」

「あら?？ 案外良いと思うけど?？」

哀はくすくす笑う。

こうしていられるだけで幸せ。

これはもう恋心で無い。

そう・・・兄弟愛?？

お姉ちゃんという存在を埋めてくれるのが彼。

「サンキュ、哀」

「いいえ、どういたしまして」

「じゃあ、光彦に返事してこいよ」

「・・・ええ」

円谷君には感謝してる。

彼は、毎日毎日私の家に来て手紙をポストに入れる。

そんな彼に、私はきつと支えられてたんだ。

それから、私の心の中には円谷君がいる……

「これって、好き?？」

分からないけど、頬が熱くなる

「灰原さん、どうしたんですか?？」

「円谷君、話があるの」

「もしかして、この前の告白のことですか?？」

「ええ……」

ドキドキドキドキドキ

鳴り止まない鼓動。

やっぱりこれって……?？」

「私、あなたのこと・・・」

・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。

本当は、心臓がバクバクしている。

けど、このままずっと・・・

そういう訳にはいかないよな。

「はい、コーヒー」

「あ、サンキュ」

「ううん、新一が頑張ってるから」

「・・・なあ、蘭」

「ん？」

ドクンドクンドクンドクンドクンドクン

やばい・・・凄い緊張してきた。

けど、このまま何も言わない訳にはいかない。

いつか、いつか言おうと思ってた言葉。

「お前は、これからも俺といたいって思ってるか?？」

「・・・え」

「俺はこれからもずっとずっと蘭と一緒にいたい」

「それって」

「お前が好きだから、愛してるから、結婚して欲しい・・・です」

「新一・・・」

「ずっと言おうと思ってたんだ」

新一は真剣な顔で蘭をジッと見つめた。

蘭はポロポロと涙を流す。

「・・・私も、新一と結婚したい」

新一は蘭をギュッと抱き寄せ、耳元で囁く。

『大好きだよ、蘭』

「あなたのこと・・好きかもしれない」

哀は精一杯の勇気を出して、言う。

きっと、顔は真っ赤だろう。

哀は俯いてた顔を上げる。

「・・・ありがとうございます」

光彦は嬉しそうにニッコリ笑った。

そんな彼の顔を見た哀も、つられてニッコリ笑った。

それと同時に、体の力が抜けてしまったのだろう。

ペタンと床に座り込んだ。

「灰原さん??？」

「ゴメンなさい、ちょっと安心しちゃって」

「・・・そうですか、良かったです」

哀は光彦の顔を見上げる。

いつの間にか、こんなに大きくなっていた。

前まではあんな子供だったのに、

もう立派な顔してるもの・・・。

「灰原さん、庭の花見ましたよ」

「え?」

「・・・とっても綺麗で、灰原さんの様でした」

「~~~~!!??」

言われ慣れない言葉にすぐ顔を赤く染める。

そして、光彦は言葉を続ける。

「あの花は、灰原さんみたいなんです」

「・・・?」

「どんどん仲間を増やして、少しずつ変わりましたよね?」

「・・・」

確かに友達が増えた。

みんなでファッションについて話すのが大好きなの。

それに、みんなで外に出て遊ぶのも大好き。

「それって、蕾から花になったんじゃないでしょうか」

「・・・え?」

「あの花は、灰原さんだと思ったんです」

あの花は、お姉ちゃんだって

ずっとずっとそう思ってた。

けど、あれは私だという彼・・・。

そんな彼の言葉が、心に残る。

「・・・ありがとう」

「いいえ、僕の思ったままのことですから」

ねえ、工藤君

私・・・もう咲けてたんだって。

もう、蕾じゃないんだって。

もう・・・花になれたんだって。

「・・・本当にありがとう」

私は何故か分からないけど、涙が零れた。

ずっとずっと円谷君は私の傍にいてくれた。

蕾はいつか、花を咲かせる。

いつかは枯れてしまうかもしれない。

けど、もしかしたらたくさんの仲間を増やすかもしれない。

いつまでも蕾な訳ではない。

色んな人から、水を分けてもらい、

自分の力で花を咲かせるのだ。

大丈夫。

あなたはいつまでも蕾のままじゃないのよ。

私も咲けた。だからあなたも咲きましょう。

そして、お別れを言いましょう。

さようなら

さようなら

今までの私

今までの蕾

蕾

エピローグ 5（後書き）

これで、最終話とさせていただきます。
結婚式までは書くつもり無かったです。

これは、哀ちゃんの成長を書きたかったのに
光彦君。もっともっと早く出したかったのに

最終話で、いきなり出てきていきなりくっついて
本当にすいませんでしたm（―――” m）ペコリ

この話中にスランプが来てしまい
あせりました・・・。

こんなことは、初めてだったんで
メッセーজくれたみなさん、本当にありがとう。

こんな私を支えてくれて本当にありがとう。
これからもよろしくお願いします。

最後にあとがき書いて終了です。
どうもありがとうございました。

歩美ちゃんの書いた英語の意味は・・・
やっぱ次回で（＊、艸、）

あとがきは楽しくしまーす（（、＼、＊））ケラケラ

あとがき

こんばんわ、こんにちは、おはようございます（笑

奈津美です！！！

今回、この「薔」という駄作を読んできたみなさん、

ありがとうございましたッ！！！！

今回は、あとがきということで顔文字など使わせていただきます。

では、ここからはメインキャラと話していきたいと思えます。＋（

◎、v、■）b

「こんにちはー！！奈津美です♪」

「哀です。」

「新ーです。」

「はい、コナンに戻れェー！！」

（＊。！＾）／、＊…；、。・★ラリホー☆…；、；＊

「何い！！！！コナンに戻ってるしッ！！！！」

「大丈夫、また戻れるから（||・艸・）ムププ」

「（||・艸・）ムププじゃねえー！！！！！！」

「ギャハハ！！（△。＊）ノミ☆バンバン！！」

「志保オ！！！！本編と違うキャラになるなあ！！！！」

「あ、ゴメンなさい」

「気を取り直して・・・いくつかの質問をさせていただきます」

Q1 『自分にとって、相手の存在は？？』

「つまり、コナンにとって哀。哀にとってコナン。という意味です」

「俺にとって、志保は大切な人だよ」

「江戸川君は、大好き。工藤君は、お兄さんとして好き」

「・・・（＊・エー＊）」

「コナン、顔赤くしないッ！！」

「う、うっせー！！」

「では、次の質問へ＋（★\$・V・艸）＊・♪」

Q2 『最近のマイブームは?』

「ちなみに奈津美は、YUIとスキマスイッチを聴くこと。後、チャットモンチーも。+ (◎、v、■) b」

「聴いてねーだろッ!! 俺は・・・やっぱ推理小説読むことかな? 後・・・もずくかな」

「私は・・・薬の研究かしら?」

「コナン・・・もずくって」

「もずくは美味しいぞ!! ったく・・・これだから素人は」

「江戸川君ったら・・・」

「なんだか分かりませんが次いー!!」

Q3 好きな歌手は??

「奈津美は、さっき言ったとおりです」

「俺は・・・倉木さんかな?」

「私は、洋楽かしら」

「そうですか〇（＊＾▽＾＊）〇♪分かる気がします」

Q4 好きなタレントは??

「私・・・今は山本祐典かな??」

「俺は・・・長澤まさみかな??」

「馬鹿ね、ここはコナンのタレントを言うべきでしょ」

「固いこというなって」

「じゃあ・・・私は、高橋英樹さんかしら（＊、p、＊）ホワワー
ン」

渋いなど心の中でつぶやいた奈津美とコナン

「じゃあ、最後に」

Q5 あなたにとって蕾は??

「私は、スランプというものがきてしまい大変でしたが・・・楽しかったです!! 文章を直すこともできましたし」

「俺も。志保と仲良くなれたし・・・大変だったけど良かった」

「私は・・・成長できた気がする」

「じゃあ、みなさん～！！！！読者さんに一言おお」

「読んでくれて～【。＋。ありカゞとうござい。いまUナ！！。＋。ゝ（・ω・、○）！！！！」

。。。＋☆＋。。。。＋☆＋。。。。＋☆＋。
。。。＋☆＋。。。。＋☆＋。。。。＋☆

どうだったでしょうか？

あまりふざけられなかったのですが・・・

これからは宝物一筋でいきます。

あ、今年を受験生なので

しばらく宝物、更新できません

すみませんm（　　）mペコリ

蕾を読んでくださったみなさん、本当にありがとうございました。

では、さようなら!!!

バ——、（。、□、）ノ——イバ——、（。、□、）ノ——イ
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。
・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。・。・。＋☆＋。

いつまでも蕾でいいで

いつか花になって下さい

そして、たくさんの仲間を増やして下さい・・・

最後に歩美ちゃんの英語の意味を

私はこれからもあなたを愛し続ける

I continue loving you from now
on.....

2007年8月1日 21:25

あとがき（後書き）

本当にご愛読？ありがとうございました。

評価・感想等待ってます〇（＊＾▽＾＊）〇～♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8296b/>

蕾

2010年10月9日19時27分発行